

中野遺跡発掘調査概要・IV

—— 四條畷市中野所在 ——

1987・3

四條畷市教育委員会

中野遺跡発掘調査概要・IV

—— 四條畷市中野所在 ——

1987・3

四條畷市教育委員会

は し が き

今回の四條畷市中野遺跡の遺跡調査は、国道163号線の拡幅工事の前段調査として、大阪国道工事事務所より受託したものである。調査地点は国道163号線と旧東高野街道の交叉点を中心とする地域であり、昭和61年8月より調査を開始して今年12月に至る期間の調査であった。

調査の結果、遺構としては古墳時代6世紀を中心とする大溝、井戸を検出した。また、この時期の土器をはじめ、ミニチュアの土器、滑石製有孔円板、勾玉、剣形石製品、舟形の木製品等、祭祀にかかる遺物の発見があった。さらに韓式系土器、製塙土器、馬の歯も発見され、中野遺跡全容解明に大きな内容を加えることになった。

また上層からは中世の掘立柱の柱穴多数、ならびにこの時期の井戸3基も発見され、当地域における中世村落の分布を解明する上に貴重な資料となった。

調査に当っては、大阪府教育委員会のご指導、瀬川芳則氏のご助言、大阪国道工事事務所、鴻池建設、八幸土木、川本産業等各位のご協力を得た。こゝに厚く感謝を申しあげる次第である。

四條畷市教育委員会

教育長 櫻井 敬夫

例　　言

1. 本書は四條畷市教育委員会が昭和61年度に建設省近畿地方建設局大阪国道工事事務所より委託を受けて実施した四條畷市中野三丁目718-5他1策に所在する中野遺跡発掘調査IVの概要報告書である。
2. 調査は昭和61年8月22日に着手し、同年12月10日まで発掘調査を行い、昭和62年3月31日に昭和61年度調査事業を終了した。
3. 発掘調査は四條畷市立歴史民俗資料館職員西尾 宏を担当者とし、調査補助員として吉田安宏、藤井大史、堀田英明があたった。
出土遺物の整理、実測などについては、西尾、吉田、藤井、堀田、野島 稔、橋坂輝実、山田のぶ子、泉 節子、柴山 交があたった。
4. 本書の執筆は、西尾 宏が行った。
5. 発掘調査の進行、報告書作成などについては、大阪経済法科大学・瀬川芳則、大阪府教育委員会・堀江門也、玉井 功、寝屋川市教育委員会・塙山則之、深江信邦、財団法人枚方市文化財研究調査会、歴古文化研究保存会、四條畷市小中学校教育研究会社会科部会の諸機関、諸氏から種々のご教示をうけた。又、発掘調査については株式会社鴻池建設及び八幸土木工業の終始懇切なご協力をうけることができた。明記して厚く感謝の意を表したい。

本文目次

はしがき

例　　言

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の位置と歴史的環境	3
III 調査概要報告	5
A. 区画の設定	5
B. 造　構	5
C. 出土遺物	22
IV おわりに	37

挿入目次

第1図 中野遺跡調査地位置図	2
第2図 中野遺跡周辺遺跡分布図	3
第3図 A、B、E地区平面実測図	7
第4図-1 C地区平面実測図(第1次面・第1次面下層)	9-11
第4図-2 C、D地区平面実測図(第1次面)	13
第5図 C、D地区平面実測図(第2次面)	13
第6図 C地区井戸1遺構実測図	16
第7図 C地区井戸3遺構実測図	17
第8図 D地区井戸4遺構実測図	19
第9図 D地区井戸5遺構実測図	21
第10図 土器実測図I	23
第11図 土器実測図II	25
第12図 土器実測図III	27
第13図 土器実測図IV	31
第14図 塗輪実測図	33
第15図 石器・石製器実測図	34

図版目次

- 図版1 C、D地区調査前全景
- 図版2 A、B地区調査地全景
- 図版3 C地区調査地全景
- 図版4 D地区調査地全景および実測風景
- 図版5 C地区井戸1
- 図版6 C地区井戸3
- 図版7 C地区大溝1全景
- 図版8 C地区河川Ⅲの杭列および遺物出土状況
- 図版9 D地区井戸4、土器出土状況
- 図版10 D地区落込み状遺構および遺物出土状況
- 図版11 D地区井戸5
- 図版12 D地区大溝2全景および舟形木製品出土状況
- 図版13 遺物写真土器I
- 図版14 遺物写真土器II
- 図版15 遺物写真土器III
- 図版16 遺物写真土器IV
- 図版17 遺物写真土器V
- 図版18 遺物写真土器VI
- 図版19 遺物写真土器VII、埴輪
- 図版20 遺物写真土器VIII
- 図版21 遺物写真土器IX
- 図版22 遺物写真土器X
- 図版23 遺物写真土器XI、植物遺体
- 図版24 遺物写真石器、石製品、錢
- 図版25 遺物写真木製品I
- 図版26 遺物写真木製品II

中野遺跡発掘調査概要・IV

I 調査にいたる経過

国道163号中野地区拡幅工事に伴う水路改修工事に際し、建設省大阪国道工事事務所及び各関係部局との協議が昭和61年2月6日に行われ、遺構の有無及び基本層序を正確に把握するため同年3月3日より3月27日まで試掘調査を実施した。

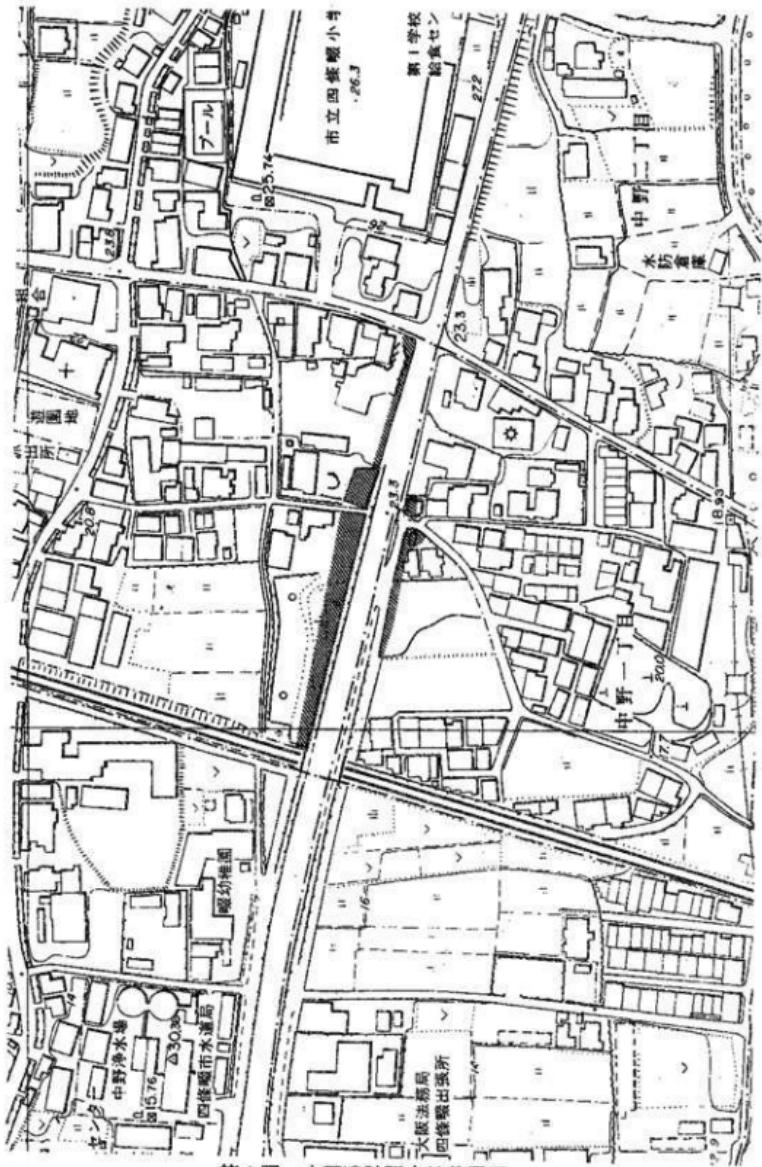
レンチを設定し、遺構、遺物の検出作業を行い、褐色砂質土層から井戸状遺構、ピット列が検出され、須恵器、土師器、瓦器、上師質皿等多量の古墳時代及び中世の遺物が出土した。

試掘調査の結果に伴い、再び建設省、各関係部局との協議を経て、文化財保護法第57条第3項の通知を大阪府教育委員会及び文化庁へ提出し、昭和61年8月22日より同年12月10日までの予定で本格調査を実施したものである。

中野遺跡は、大阪府四條畷市中野に所在し、昭和52年度に国道163号と国鉄片町線が交差する地点の西側、国道163号南側道部分の発掘調査により、古墳時代と鎌倉時代から室町時代にかけての複合遺跡であることが判明して以来、数次の埋蔵文化財発掘調査により古墳時代の大溝、東西約600m、南北400mに広がる古墳時代の集落跡、井戸状遺構が検出され、須恵器、製塙土器、滑石製臼玉等が出土し、また、平安時代から中世にかけての掘立柱建物跡と、6基の井戸が検出されている。

このように中野遺跡は、古墳時代、中世の集落、古墳時代の祭祀遺跡の解明などに重要な位置を占めているといえる。

今回の調査地は、中野三丁目718-5、735-2に所在し、中野遺跡の第九次にあたる発掘調査である。



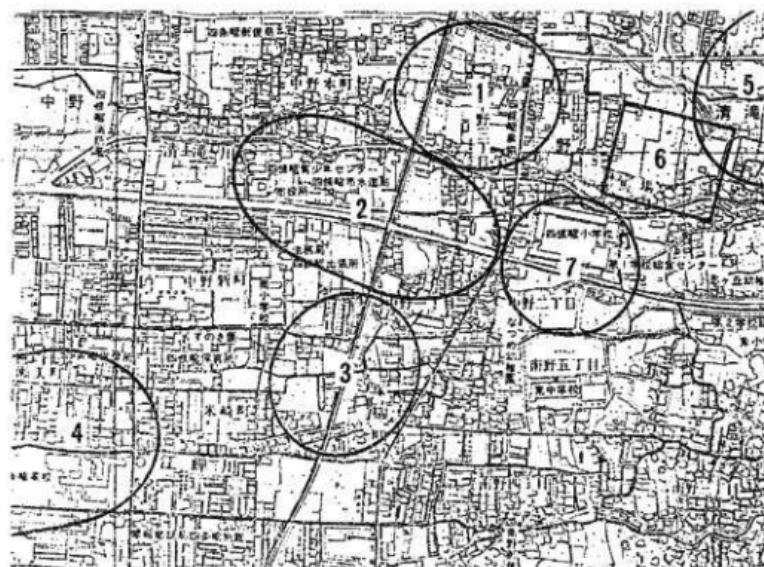
第1図 中野遺跡調査地位置図

II 遺跡の位置と歴史的環境

中野遺跡は四條畷市中野本町、中野新町、中野三丁目にかけて所在する。

四條畷市は大阪府の東北部に位置し、東は奈良県と境を接し、市の東半分は生駒山系支脈の、上として第3期花崗岩からなる山地帯で、西半分はこれら山地帯から流出した砂礫の沖積によって平野部を形成している。この山地帯と平野部の間には、大阪層群からなる丘陵、扇状地性段丘などが細長く南北に広がっており、西流する讚良川、清滝川、権現川によって、北から忍ヶ丘丘陵、清滝丘陵に分断されている。

当遺跡はこの清滝丘陵と平野部との境界付近に位置しており、今回の発掘調査区域の中野三丁目付近は標高T.P. 23.2~20.8mであり、平野部の最東端にあたる。



第2図 中野遺跡周辺遺跡分布図(S=1/10000)

- | | |
|-----------|--------------|
| 1. 奈良井遺跡 | 5. 清滝古墳群 |
| 2. 中野遺跡 | 6. 正法寺跡 |
| 3. 南野米崎遺跡 | 7. 四條畷小学校内遺跡 |
| 4. 扇屋遺跡 | |

本市の平野部東端南北に通じる東高野街道、中央を東西に通じる清滝街道沿いには、中世の掘立柱建物跡、井戸、溝等の遺構が存在し、中世村落が栄えていたことがうかがわれる。このように四條畷は古い時代から陸路交通の要地として地理的に重要な位置を占めていたことは、多くの遺跡の存在によっても推測できる。

市内に所在する遺跡としては、旧石器時代の讚良川床遺跡からナイフ形石器、細石器、削器等が又岡山南遺跡からは木葉伏尖頭器が出土している。縄文時代では遺跡も増加し、早期の押型文土器が出土した田原遺跡をはじめ南山下遺跡、砂遺跡、更良岡山遺跡、岡山南遺跡などがあり、とくに後、晩期の遺跡が数多く所在する。弥生時代の遺跡では古代河内潟の北端で、畿内第I様式の大壺が出土したことによって、北河内で最古の遺跡として知られる雁屋遺跡が所在する。雁屋遺跡はその後の発掘調査で弥生時代中期の方形周溝墓4基が検出され、木棺20基、土器棺1基が発見された。古墳時代になると、とくに忍ヶ丘丘陵先端部に竪穴式石室をもつ全長約90mの前期に属する前方後円墳の忍岡古墳や、中期～後期に属する更良岡山古墳群、清滝古墳群が所在する。古墳時代の集落は四條畷市の台地上一帯で発見されている。とくに岡山南遺跡からは堅魚木をのせた切妻形の家形埴輪、忍ヶ丘駅前遺跡からは見事な人物埴輪や、ほぼ完形の馬の埴輪等が出土しており、埴輪が古墳以外の場所で出土したことは珍しいと云われている。

本調査地に隣接する遺跡に限っても、北北東350mには2基の円墳を検出した前記清滝古墳群、北東250mには古墳群を削平して建立された白鳳時代の薬師寺式伽藍配置をもつ正法寺跡、北東150mには韓式土器が完全出土した四條畷小学校内遺跡、北100mには辺約40mの方形周溝祭祀場遺構が検出され、手捏ね土器、人形土製品、滑石製品などが出土した奈良井遺跡、さらに同じ中野遺跡内にある第十次発掘調査地西中野北西へ500mでは、滑石製臼玉、ガラス玉等1,500点が出土している。また南西500mには弥生時代遺跡の前記雁屋遺跡が所在する。

III 調査概要報告

A. 区画の設定

国道 163 号北側の調査地を東から西にそれぞれ A・B・C 地区、国道南側を西から D・E の 5 地区に区画設定。

B. 遺構

盛土、旧耕作土、床土を機械掘削したのち、遺構検出のための精査を人力掘削した結果検出した主な遺構は次のとおりである。

(A 地区) (第 3 図・図版 2)

調査地の北壁断面の基本層序は、第Ⅰ層・盛土、厚さ 65cm~90cm、第Ⅱ層・旧耕作土、灰黒色砂質土、厚さ 15~20cm、第Ⅲ層・床土、黄褐色砂質土、厚さ 17~20cm、第Ⅳ層・灰黄褐色砂質土、厚さ 20~25cm (土師質皿、土師器、須恵器の小破片を多く含む)、第Ⅴ層・黄褐色砂質土、厚さ約 20~30cm で遺構のベース面を構成している。第Ⅵ層・灰褐色砂質土。

旧耕作土、床土は東から西へ 3 段になって低くなっている。上段と中段の境界は花崗岩一段の石組み、また中段と下段には径 10~15cm の杭列を、それぞれの耕作地の西端にはほぼ南北に並べ、東西の田を区切っている。中段の旧耕作地の東西の幅は 17.8m で、上段と下段の比高差は 72cm である。中段旧耕作面の標高は T・P・22.6m である。

灰黄褐色砂質土層 (第Ⅳ層) を除去すると掘立柱建物跡の柱穴群と溝状遺構が検出された。

1. 掘立柱建物跡 (第 3 図・図版 2)

ピット群が A 地区全般にわたって第Ⅴ層黄褐色砂質土より検出されたが、調査地東端で検出された No.15, 19, 20, 24 の 4 個のピットは径 30~31cm、深さ 30~31cm、柱間 1.2 m の間隔で、ほぼ東西 (E-4°-S) に並んで検出された。ピットはさらに調査対象地外の南側に続くものと推定され、2 柱 × 3 柱の建物跡となる可能性がつよい。

ピット内から瓦器碗、瓦質羽釜、土師質小皿、黒色土器、土師器、須恵器等の平安~鎌倉時代、古墳時代の 2 時期の遺物がすべて小破片で出土した。

2. 溝状遺構 (第 3 図)

ほぼ南北に併行する溝状遺構を A 地区西側にわたって検出した。すべて第Ⅴ層黄褐色砂質土をベースにしている。

溝 2 は溝中央部で溝上部溝 1.5 m、深さ 5 cm、溝内に堆積していた灰褐色土中より、

土師質皿、瓦質羽釜、須恵器、土師器の小破片、サヌカイト片1が出土した。溝1は溝中央部で上部幅80cm、深さ9cmで、溝内から土師質皿、瓦器塊、瓦質足釜、土師器、須恵器、円筒埴輪、韓式系土器（土師質、須恵質）の各小破片にまじって、打製石鐵1、サヌカイト片1の出土をみた。溝8は溝中央部で上部幅110cm、溝下部幅75cm。深さ28cmで断面はU字形を呈している。土師質皿、瓦器塊、円筒埴輪、須恵器、土師器、韓式系土器がいずれも小破片で出土した。

A地区で検出した溝の底部の比高差は2~8cmで、すべての溝は南から北に流路をもっていたと推定される。

またほとんどの溝内からピットと同じく平安~鎌倉時代の黒色土器、瓦器塊、瓦器羽釜、土師質皿、古墳時代中・後期に属する須恵器高杯、蓋杯・甕、韓式系土器、土師器甕、壺、製塙土器、円筒埴輪の中世・古墳時代の2時期にまたがる遺物が、すべて小破片で出土しており、復元可能なものはなかった。

(B地区) (第3図・図版2)

現地表面は標高T・P・23mから20.70mに下がる緩斜面上に所在し、昭和20年ごろまで家屋に使用されていたため、調査地の擾乱がひどく、調査地の東南端で中世・古墳時代遺物を含む溝状遺構が検出されたに過ぎなかった。他は住宅使用時に使用されていた瓦を井筒とした井戸2基、直径1~1.2mの桶の底部、溝等が検出された。

溝状遺構では、溝1で円筒埴輪片1、土師器、須恵器片、溝2、3では現代の瓦、茶碗に混って土師小皿、瓦器、須恵器片が出土したが、他の溝での出土遺物は、土管、釘、瓦、陶磁器片等すべて明治~昭和期のものであった。

(C地区) (第4図・第5図 図版1・3)

国道163号北側の側道に沿って、東端9.2m幅、西端2.6m幅、東西101.3mにのびる調査地である。

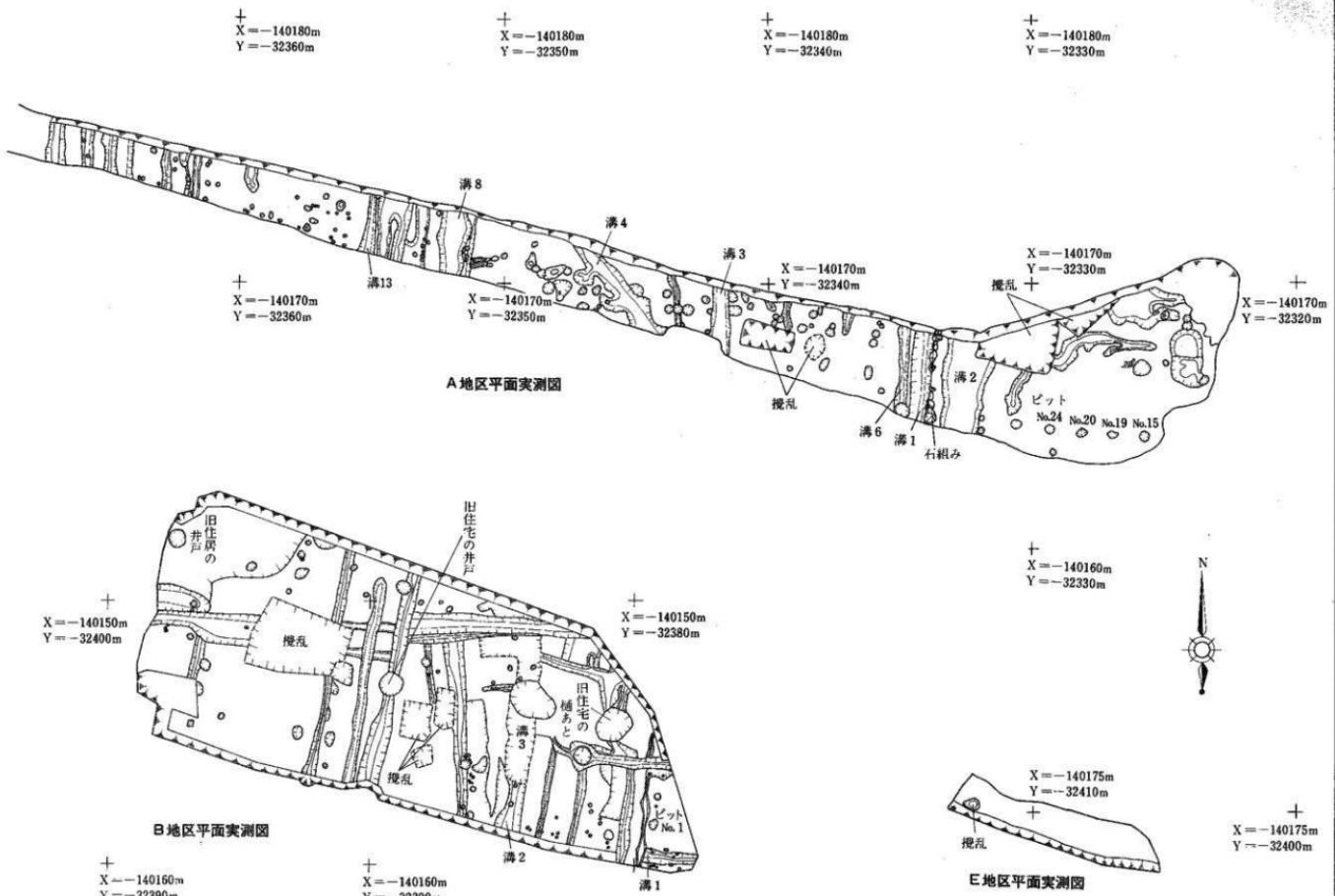
現地表面は東端が標高T・P・20.65mで西に向けてゆるやかに下がり、西端との比高差は1.65mである。調査地の東部分の1/3は旧耕作土の床土まで擾乱をうけており、旧耕作地は三段に、西に向けて低くなっている。

(第1次面) (第4図)

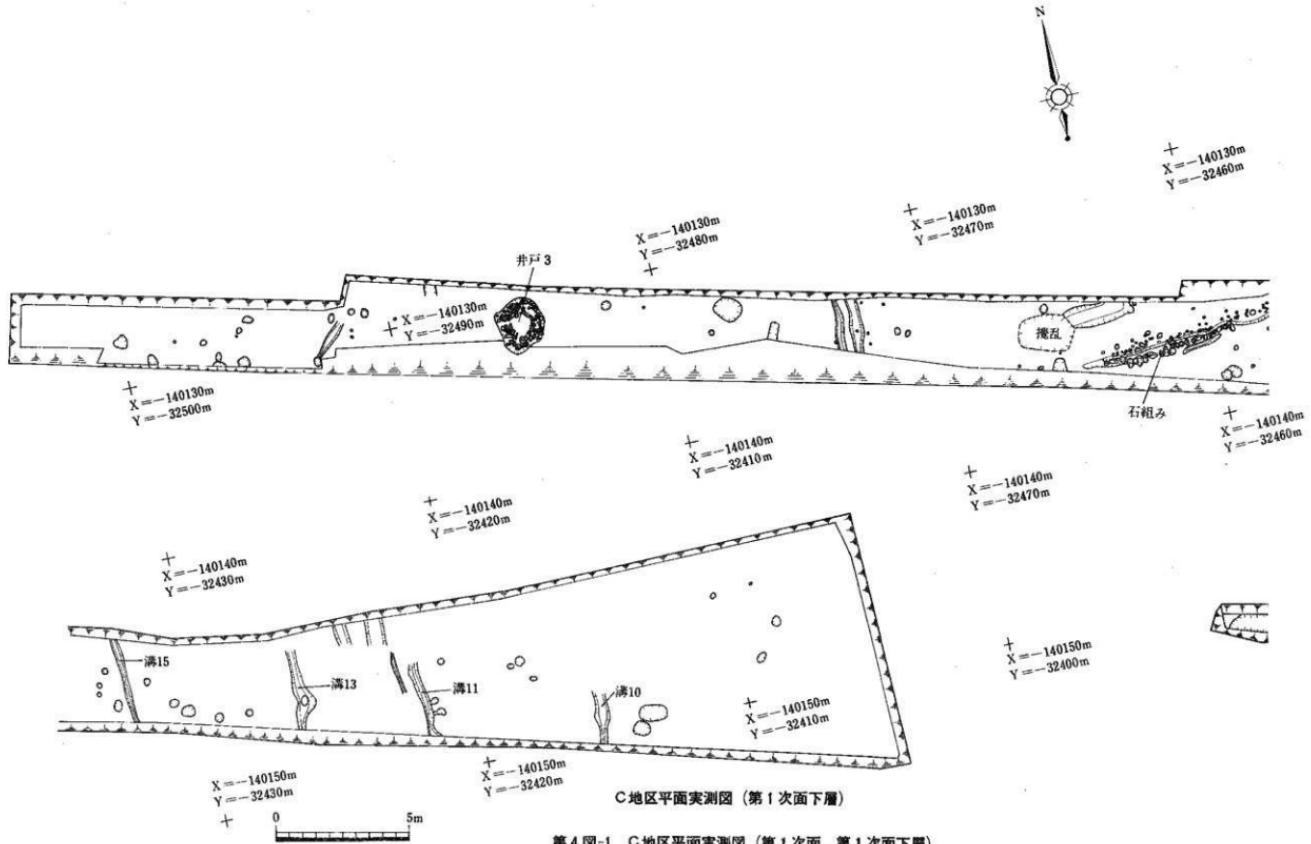
盛土、旧耕作土、床上を機械掘削のあと、人力掘削し、瓦器、土師質皿、土師器、須恵器小破片を包含する第IV層灰黄褐色砂質土を取り除くと掘立柱建物跡とみられる柱穴、杭列、溝状遺構が検出された。

1. 掘立柱建物跡 (第4図・図版3)

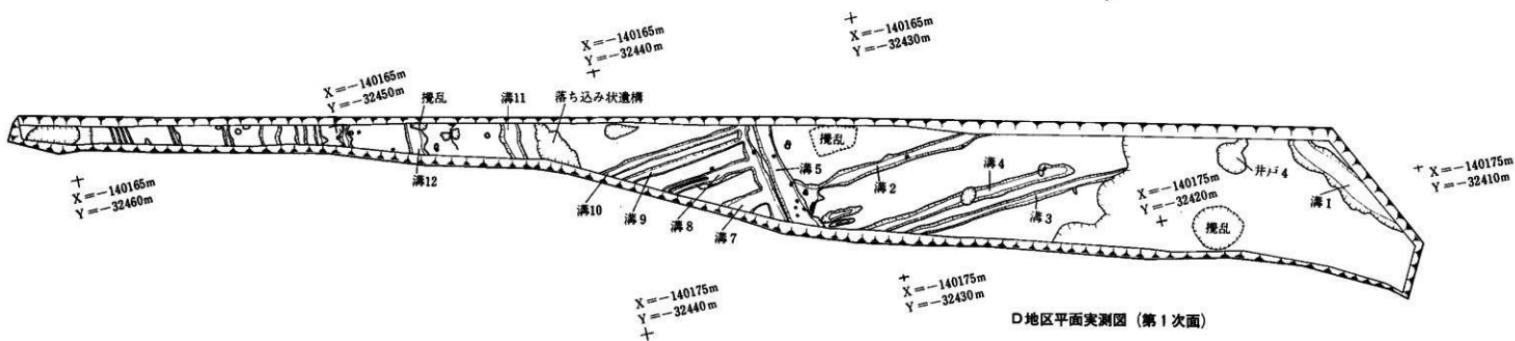
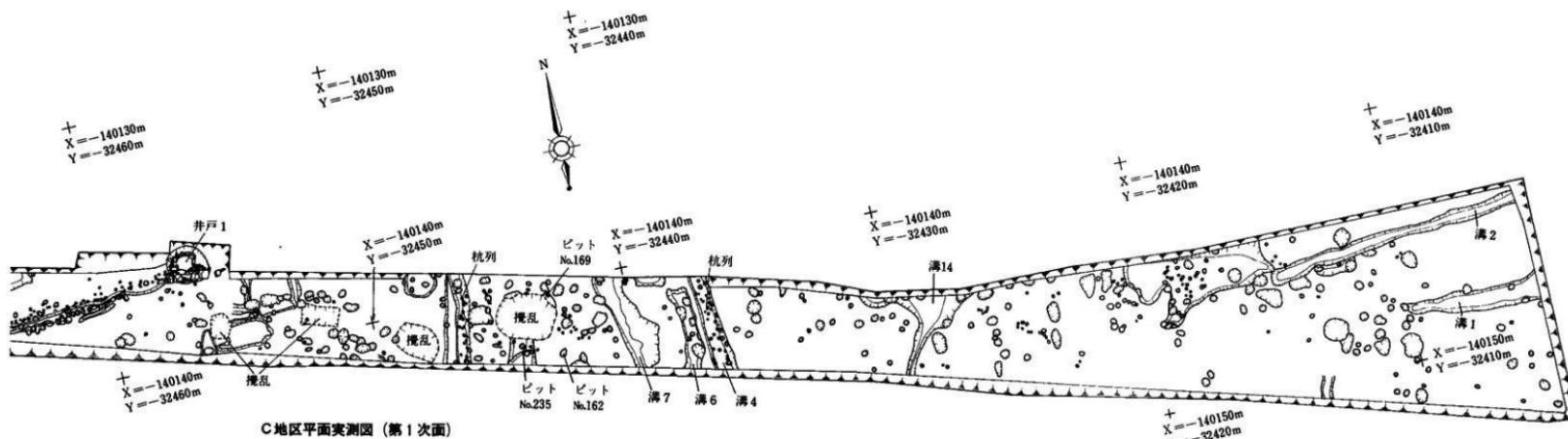
調査地の東部分に集中的にピットが検出されたが、西部分は側道工事その他により擾乱がひどくピット数も少なかった。



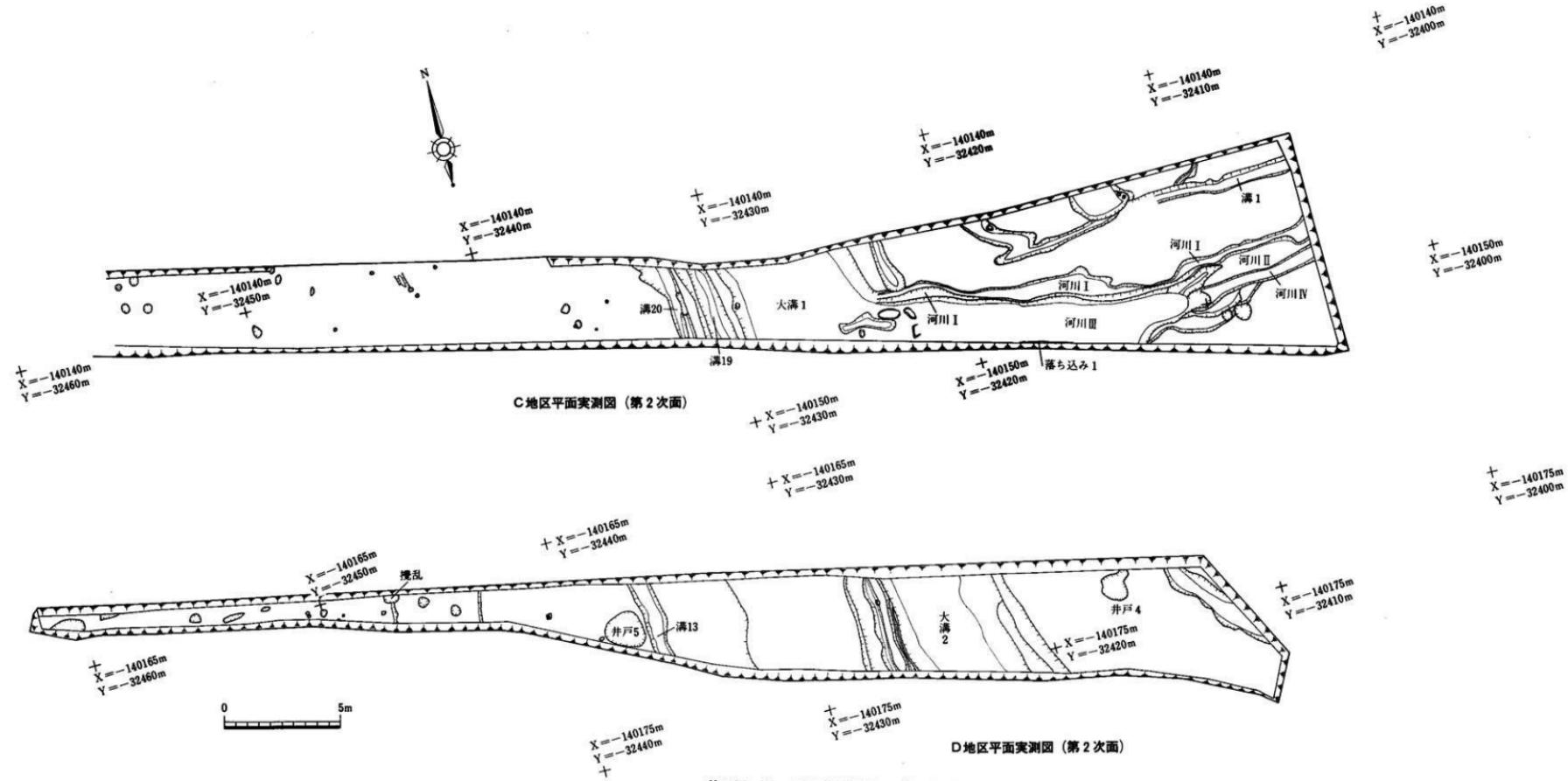
第3図 A、B、E地区平面実測図



第4図-1 C地区平面実測図（第1次面、第1次面下層）



第4図-2 C、D地区平面実測図（第1次面）



第5図 C、D地区平面実測図（第2次面）

建物造構は確認出来なかつたが、ピット内からは瓦器塊、土師質皿、土師器高环・塊、甕、瓶、鍋の把手、須恵器脇、蓋環、高环、壺、甕の小破片のいずれも中世・古墳時代の2時期にわたるもののが出土している。なおピットNo.169から渡来銭の、皇宋通宝（北宋初鑄造年1039年）1点が出土した。

2. 溝状造構（第4図）

東西に2条、南北に13条の溝状造構を検出した。溝1は溝中央部で溝幅上段0.9m、下段0.6m、深さ23cm、断面U字形を呈する。溝2は溝中央で幅0.5m、深さ21cm、溝1・2は東西に併行して検出されたが、それぞれ西端で切れている。溝1・2に堆積していた灰褐色砂質土中から土師器高环脚部、須恵器の小破片が出土した。溝14は南端で幅溝上段30cm、下段10cm、北端で上段3.7m、下段1.58mと北に大きく広がっている。深さ0.15mで溝底の比高差は11cmで北に流路を向けていると考えられる。出土遺物は極少量の土師質皿、土師器、須恵器の破片であった。南北に走る溝4は底部から杭列が検出されたが、旧耕作地の東西を区切る畦畔であると考えられる。溝6は溝幅上段67~100cm、下段27~50cm、深さ8~16cmで調査地北端で切れている。瓦器塊、土師質皿、土師器底底部破片とともに滑石製有孔円板1点が出土した。溝7は東側は肩部から底部にかけてゆるやかな傾斜をもち、西側は肩部から急に落ち込む上段最大幅1.5m、深さ15~30cmの南北にのびる溝状造構である。瓦器塊17個体分、土師質皿15個体分、瓦器足釜脚部6点とともに土師器・須恵器片が出土した。

溝8は、溝底に南北に走る杭列が検出され、溝に堆積した灰褐色砂質土中から瓦器塊3、瓦器皿1、土師質皿7、土師器・須恵器片が出土した。

これらの溝状造構はすべて同一層位から検出されたものであり、出土遺物からみて中世の造構と考えられる。

3. 井戸

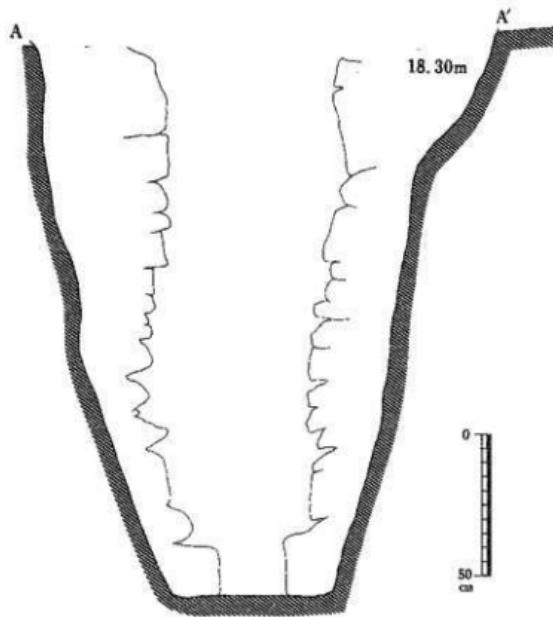
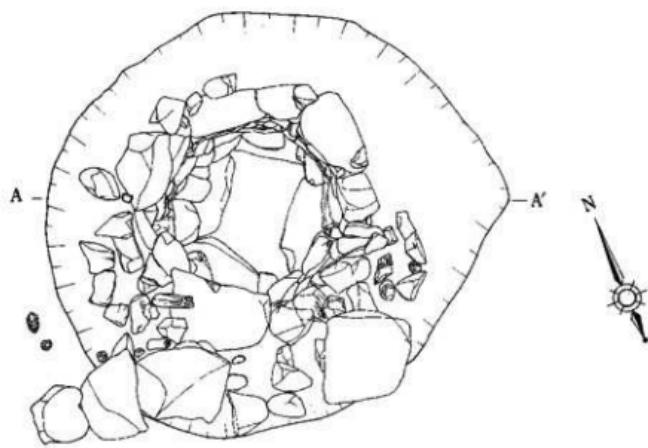
（井戸1）（第4図・第6図、図版5）

試掘時に確認していたもので、調査地中央の北側で検出した。大石4個を四角形に組合せ、空間の中央部を湧水部とした底部をもち、上部は円形に石組みしたもので、規模は井戸上部径65cm、底部41cm、深さ1.9mである。井戸底より瓦質足釜脚部、瓦器塊片が少量出土した。

井戸の造構検出面はピット、溝状造構と同一検出面であり、出土遺物からみても鎌倉時代の造構と考えられる。造構検出面は標高T・P・18.13mである。

（井戸3）（第4図・第7図、図版6）

新たに調査区西端に近いところで井戸1と同じ層位面で検出したもので、上部は石組み、底部は厚さ1.8cm、幅9~12cmの板材を割竹のタガで上下2ヶ所をしめた径56~57cmの樽



第6図 C地区井戸1造構実測図

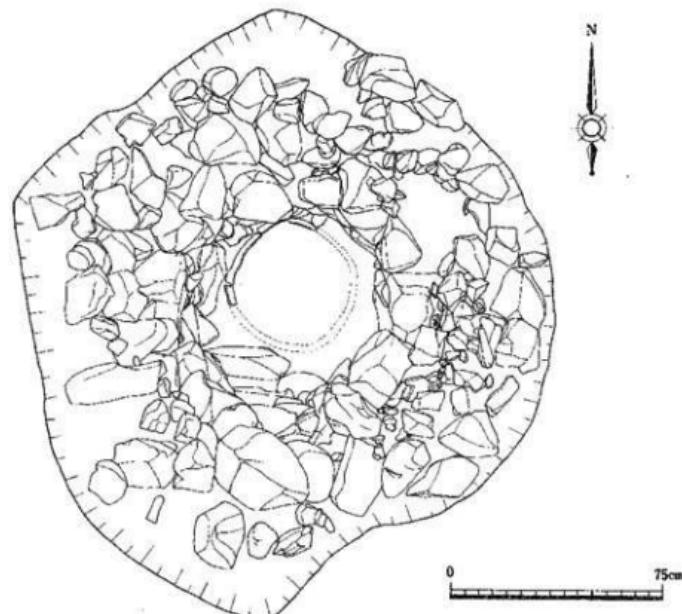
状のものを埋めこみ、さらにその下部に径52~55cmの曲物をはめこんだもので、石組み上部より井戸底部まで2.25mである。井戸内堆積土上層より瓦質足釜・碗・堀り鉢（片口）火舎、土師質皿、曲物内よりヘラ状竹製品が出土した。出土遺物より見て鎌倉時代から室町時代にかけて使用されたと考えられる。造構検出面は標高T・P・17.3mである。

〔第2次面〕（第5図）

中世造構よりさらに人力掘削を行ない第Ⅱ層灰褐色砂質土を除去すると2次面が検出された。おもな造構は古墳時代の大溝1とこの大溝1に流入している自然河川である。

1. 大溝1（第5図、図版7）

調査区東端に近い溝13の下層で南北に走る大溝を検出した。大溝は調査地外の北、南へのびており、検出された造構は、溝東側肩部で標高T・P・19.2m、上段溝幅は北端で5.9



第7図 C地区井戸3造構実測図

m、溝底部幅4.04m、深さ67cm、調査地内で検出した溝の長さは3.9m、断面はU字形を呈する。溝南部は西流する自然河川により、東肩部は消失している。溝底部の南北の比高差は7.7cmで北方向に流路をもっている。溝内堆積土最下層にあたる灰黒色粘質土層より須恵器高环脚部、短颈瓶、甕、瓦片、土師器瓶、高环、桃の種子、菱の実、馬齒の出土をみた。また堆積土層最上部の灰褐色粘質土層より石斧1点が出土した。

2. 自然河川（I、II、III）（第5図、図版8）

南北に走る大溝1に向って調査地東端より西流する自然河川である。断面観察によりこの自然河川は短期間に流路を3度変えていることが確認された。河川Ⅲが切り合い関係からみて最も古いものである。河川Ⅲは調査地東端では幅2m、深さ10~15cm、東端から西へ5mのところで川幅が1mとなり、約60cm落ちこんで直線的に大溝1の東側肩部をつききり流入している。この落ち込みから西へ7mにわたって、流木、杭列が出土した。杭列は3.5mの間に7本の杭すべてが、杭頭を南にむけ、しかも杭先は一直線上に並び、厚さ30cmの砂層に押し倒された状況を呈していた。この杭列の間から甕状のもの、シャンボ、加工木製品、土師器、須恵器の細片が出土した。杭は長さ46~106cm、直径3.4~5.5cmでいずれも杭先に加工痕がみられた。

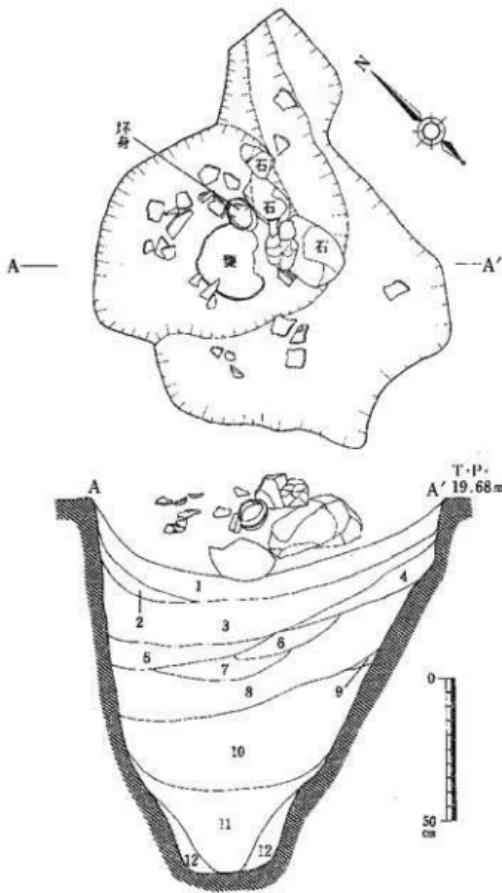
この杭列のおわる南側は、ほぼ直角的に約60cm落ち込む灰黒色粘質土層(有機質を含む)がみられた。この落ち込み1に河川の水が流入しないよう流路を導く必要があったと思われるような状況であった。河川Ⅰ・Ⅱは川幅30~60cm、深さ15~20cmで極めて水量も少なかったと考えられるが、それぞれ大溝1に流入している。この河川Ⅰ・Ⅱ・Ⅲから古墳時代中~後期の須恵器高环、甕、提瓶、瓶、甕、土師器高环、甕、鍋、瓶、製壺七器、韓式土器、手捏ね土器等の土器類の他滑石製勾玉、臼玉、劍形石製品、有孔円板、ガラス製小玉、サメカイト片、軽石、鹿角、馬齒、桃の種子が出土した。土器類はほとんどが小破片で、破碎されて投棄されたような状況であった。

(D地区)（第4図、第5図、図版1~4）

盛土下の旧耕作土が東から西にかけて三段に低くなっている。上段の旧耕作地と下段の旧耕作地の比高差は34cmである。旧耕作地の上段にあたる調査地の東端より13.5mまでの東部分の基本層序は第Ⅰ層盛土、第Ⅱ層旧耕作土、第Ⅲ層青灰色砂質土、第Ⅳ層明灰色砂質土、第Ⅴ層茶褐色土、第Ⅵ層淡茶褐色砂質土である。旧耕作地の中段、下段にあたる西部分の基本層序は、第Ⅰ層盛土、第Ⅱ層旧耕作土、第Ⅲ層灰褐色土、第Ⅳ層明黄褐色土となっている。

検出した主な遺構は古墳時代井戸状造構、中世溝状造構、井戸、落ち込み（土壙）である。

1. 井戸4（第8図、図版9）



- | | |
|------------|------------------|
| 1. 黒褐色粘質土 | 7. 青灰色砂質土 |
| 2. 青灰色砂質土 | 8. 灰褐色砂質土 |
| 3. 灰黄褐色粘質土 | 9. 灰黑色砂質土 |
| 4. 青灰色砂質土 | 10. 暗灰褐色砂質土 |
| 5. 淡青灰色砂質土 | 11. 灰褐色砂質土 |
| 6. 黄褐色砂質土 | 12. 青灰色砂質土(礫まじり) |

第8図 D地区井戸4遺構実測図

調査地東端で第IV層
明灰色砂質土から掘り
込まれた井戸状遺構を
検出した。
検出面の標高はT・P.
19.68mである。遺構
は平面が東西幅1.30m、
南北幅約1.30mの不整
形で、深さは1.46mで
ある。東西の断面は西
側はほぼ垂直に下り、
東側は30~60°の傾斜
をもって三段に掘りこ
まれており、底部は径
30cmの平面円形を呈す
る。

井戸上層部は、平面
が幅南北1.24m、東西
1.9mの不整形円形で、
断面はU字形、深さ35
cmに落ち込んでおり、
底部中央部に洞部径23
cmの上部器窓の下半部
が上向きに埋めこんだ
状況でおかれ、その上
部に須恵器壺身・高环
脚部・甕口縁部片・瓦
質羽笠片が25cm大の花
崗岩5個がおかれた西
側に、甕底部を中心
にして出土した。その下
部は12層にわたる堆積
土が検出され、さらに

その下部の灰褐色砂質土層（井戸上面より - 1.1 m）中より土師器甕・壺、手捏ね土器が完形で各1点、最下層灰褐色砂質土中より土師器甕1点が出土した。

2. 溝状遺構 ピット（第4図・第5図）

調査地東端より13.5m以西の旧耕作地の中段・下段にあたる部分の盛土、旧耕作土を除去すると東西に7条、南北に12条のそれぞれ併行する溝状遺構とピットを検出した。いずれも中世の遺構である。

（溝状遺構）

検出した遺構は溝幅38~46cm、深さ8~10cmの小溝で、溝5は杭列が並び旧耕作田の境界となっている。各溝から瓦器壺、土師質皿、土師器、須恵器の小破片が出土した。検出面の標高はT・P・19.6m前後である。

（ピット）

検出したピット内から瓦器、土師質皿、土師器が出土した。

3. 落ち込み状遺構（図版10）

東西に溝7・8・9・10の4条がはしる西端部で、第II層旧耕作土を除去した面で検出した。T・P・東西1.1m、南北2.1m、深さ0.7mの落ち込み状遺構である。土師質皿135個体分（うち完形および完形に近いもの75個体）、瓦器壺9個体分、瓦器皿3、瓦器質鉢2、砥石1が重なりあう状態で出土した。出土遺物からみて鎌倉時代の遺構と考えられる。

4. 井戸5（第9図、図版11）

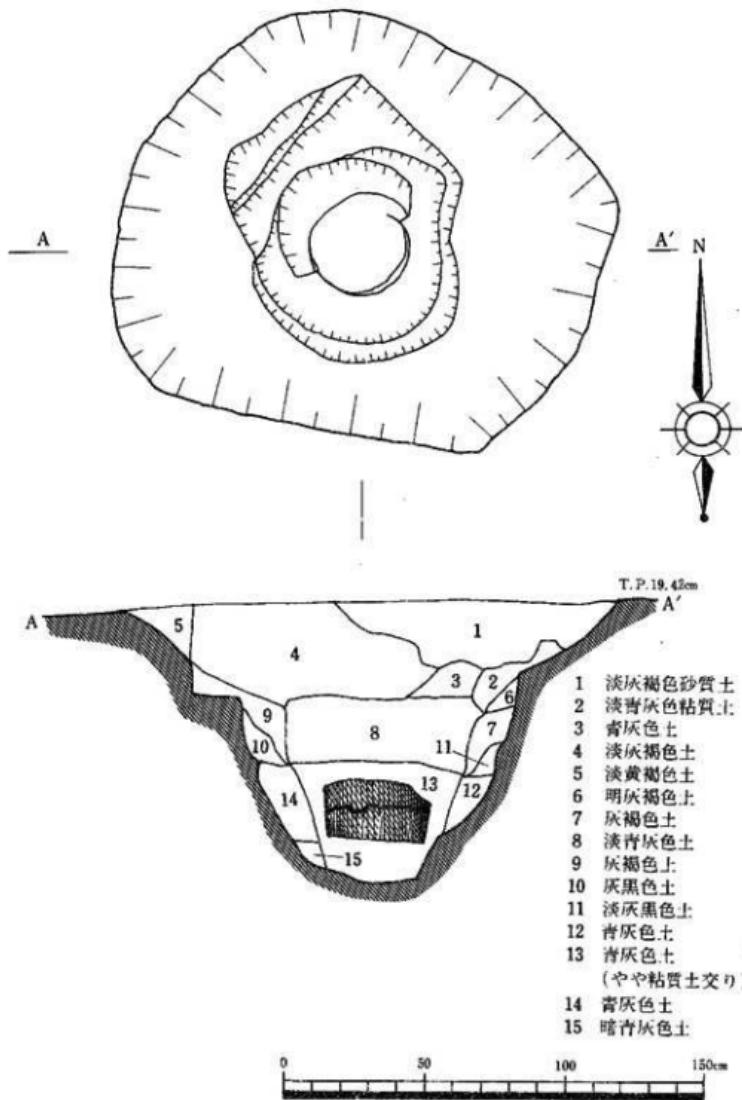
溝8・9を検出した第Ⅲ層灰褐色七層を除去した面で、検出面径1.6mのほぼ円形の遺構を検出した。

遺構は底部に直径33cm、高さ17cmの曲物を埋め込んだ素掘り井戸で、遺構検出面の西肩部は標高T・P・19.42mで、深さは92cmである。井戸内は第1層淡灰褐色砂質土、第2層淡青灰色粘質土、第3層に青灰色土が堆積しており、遺構肩部から瓦器壺、土師質皿3、須恵器片・底部曲物内により瓦器壺、土師質皿、須恵器の細片が出土した。

5. 大溝2（第5図、図版12）

調査地東部で、第V層茶褐色土層より掘りこまれた大溝を検出した。北端の溝上部幅4.7m、下部幅3.2m、深さ0.84m、南端の溝上部幅4.85m、下部幅2.85m、深さ0.66m、調査区域内の全長は4.5m、断面U字形の大溝である。溝東肩部は標高T・P・19.55mをはかる。この大溝の方向はN-20°-Wであり、直線的に延長すると、国道163号をへだててC地区の大溝1とつながり、両者は同じ大溝に属するものと考えられる。大溝1と2の溝底の比高差は19cmであり、流路を北にとっていたと考えられる。

溝西側肩部より馬齒4、須恵器甕・器台片が出土し、底部の堆積土最下層暗灰黑色土層より人物埴輪とみられる埴輪片6点、須恵器高环・壺・土師器高环・鍋の破片、桃の種子



第9図 D地区井戸5遺構実測図

43点、堆積した流木の中から舟形木製品が出土した。また溝検出面上層の青灰色砂質土から有孔円板が1点出土した。

(E地区) 造構、遺物の存在は確認できなかった。

C. 出土遺物

掘立柱跡、落ち込み状造構、溝等から出土した遺物は土器、石器、石製品、木製品、動物遺体からなる。土器は古墳時代中～後期に属する須恵器、土師器、埴輪、鎌倉時代～室町時代の瓦器、土師質皿が多く出土したが、D地区井戸状造構を除けばほとんど小破片での出土である。また祭祀遺物と考えられる石製模造品、手捏ね土器、舟形木製品などの出土をみた。

1. 土器類 (第10図～14図)

a. 土師質皿 (第10図、図版13)

C区溝7・8、D区落ち込み状造構を中心にほとんどの遺構で出土をみたが、色調はすべて淡褐色である。

(D区落ち込み状造構) (第10図1～57、図版13)

完形または完形に近いもの75点すべてが小皿で、口径7.6～8.8cm、器高1.2～1.6cmとバラツキがあるが、底部より内湾氣味に外方にのび、口縁部もやや内湾しながら上方にのび端部にいたるものが多い。また底部中央がやや上昇底氣味のものとそうでないものの2種類がある。端部の外反するものは1点のみであった。

(D区井戸5) (第10図-75)

中皿一口径12.4cm、器高2.1cm

(C区溝7) (第10図-58～69、図版13-5)

小皿一口径8.2～8.6cm、器高1.0～1.8cm、底部より直線的に上外方にのび、端部は丸味をおびておわるものが多い。中皿一底部より直線的に上外方にのび、端部は丸くとじる。口径10.0cm、器高2.2cm

(C区溝8) (第10図70・71、図版136)

小皿一口径7.8～8.2cm、器高1.0～1.4cm

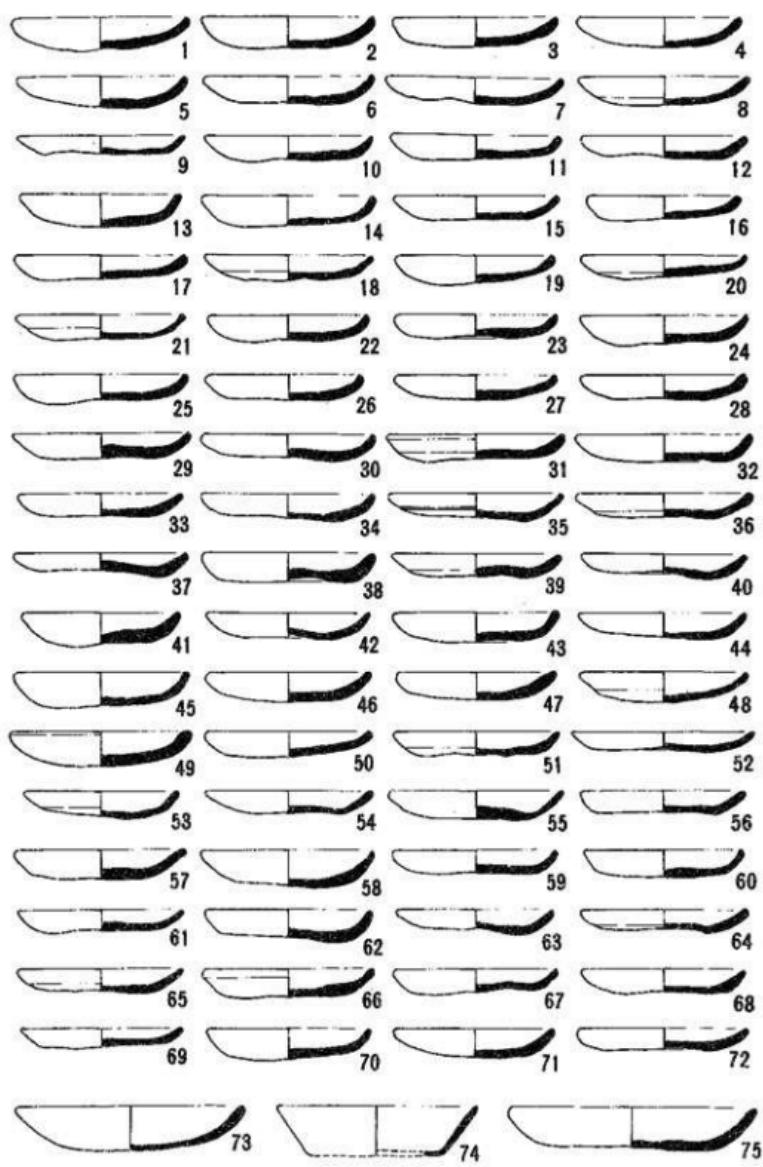
(C区ピットNo.235) (第10図73、図版13)

中皿一口径11.2cm、器高2.2cm

b. 瓦器 (第11図、図版14)

土師質皿同様の出土状態であるが、瓦質足釜、羽釜はC地区井戸1・3の中世井戸からの出土が多い。

瓦器塊一口縁端部がやや外反するもの、内湾しながら上方にのびるもの、口縁部が比較



第10図 土器実測図 I

的に直線的に上外方にのびるものがみられる。

(C地区溝) (第11図-1・2、図版14-4)

完形2点ほか15個体、うち高台断面が逆台形5点、逆三角形12点。

1. 口径13.6cm、器高4.3cm、高台断面逆台形、口縁部内面の暗文は細く、疎であり、口縁部外面上半部に数条の雑なミガキ調整が行なわれている。見込みは連結輪状文である。口縁端内面に沈線をめぐらす。

2. 口径14.4cm、器高4.9cm、高台断面逆三角形、口縁端内面に一条の沈線、内面の暗文は密でていねいに施されている。外面は不明。見込みは省略した連結輪状文。

(C地区溝8) (第11図-3・4、図版14)

3. 口径13.2cm、器高4.1cm、断面逆三角形を呈する高台が、底部下端より上位に張りつけてある。外面にも雑な6条の暗文が施され、見込みは連結輪状文。

4. 口径12.6cm、器高3.8cm、高台断面逆三角形、暗文は疎である。見込みは輪状様である。

(C地区溝19) (第11図-5)

5. 口径12.4cm、器高3.9cm、高台断面逆三角形、口縁端内面に沈線、内面に疎い暗文。ゆがみがひどく、口縁部の横ナデが目立つ。

(D地区井戸5) (第11図-6、図版14-3)

6. 口径13.2cm、器高3.9cm、高台逆三角形、端部内面に1条の沈線、見込みは省略した連結輪状。

(C地区) (第11図-7)

7. 口径14.8cm、器高5.6cm、高台断面表方形内面の暗文は密でていねい。見込みは鋸歯状のものを直交させたもの。内面に1条の沈線、中世造構精査中に溝4上層より出土。

(D地区落ち込み状造構) (第11図-8~10)

8. 口径12.8cm、器高4.2cm、高台は逆台形。暗文は疎で見込みは不明。

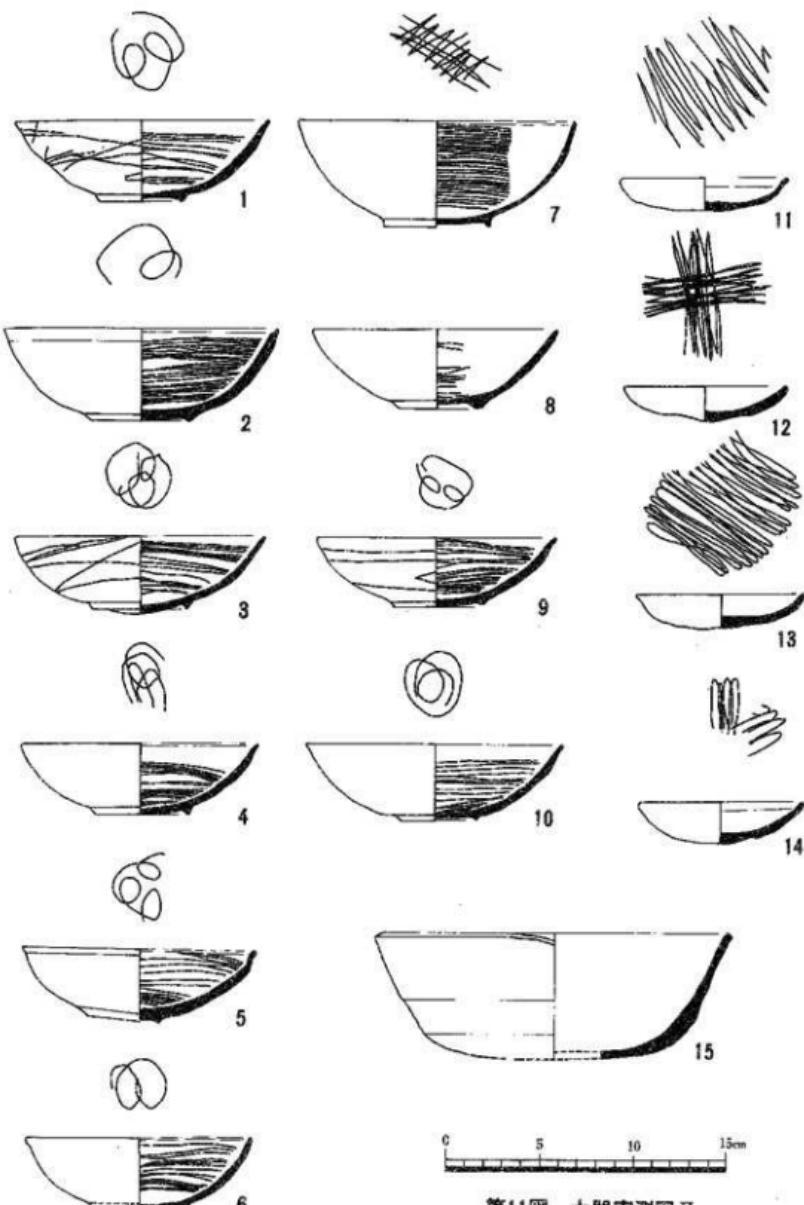
9. 口径12.6cm、器高3.6cm、断面逆台形の高台が底部下端より上位にある。内面暗文はやや疎で外面に3~4条の粗い暗文を施す。見込みは連結輪状文。

10. 口径13.6cm、器高4.1cm、高台逆三角形。口縁端内面に沈線、内面の暗文は端部よりやや下方まで施され疎である。見込みは連結輪状文。

瓦器皿 (第11図11~14、図版14)

11. C地区ピットNo.162から出土。口径8.6cm、器高1.7cm、口縁端部外反、内面の暗文はジグザグ状。

12. D地区落ち込み状造構より出土(図版14-1)。口径8.6cm、器高1.9cm、ややイビツな平底をもち、ジグザグ状の暗文を直交させている。



第11図 土器実測図 II

13. C地区中世造構精査中、溝6上層より出土。口径9.2cm、器高1.8cm、口縁端部わずかに外反、内面の暗文は継長8の字連続文。

14. D地区落ち込み状造構より出土。口径9cm、器高2.2cm、やや丸味をおびた底部をもち、口縁端はやや内湾気味に外上方にのび、丸くおわる。暗文はヘヤーピン状のものを交差したもの。

瓦質鉢（第11図-15）

15. D地区落ち込み状造構より土師質小皿と共に出土。口径18.2cm、器高6.6cm。底部より肥厚して内湾して上外方にのび、端部は外傾した平面をもつ。片口を有する。

瓦質足釜

C地区井戸3の井戸検出面より-80cm内外の堆積土中より出土した。足釜は、鍔が1.2cmと幅がせまく、体部外面は不調整でススの付着がいちじるしい。足は断面円形で下半部はわずかに細くし、下端を外方に折り曲げている。脚の長さは20cm、体部は口径に比して器高が低いと推定され、口縁端面に浅い沈線をめぐらし、体部内面はハケメ調整をしている。

瓦質羽釜

C地区井戸3出土。口縁部の小破片のみであるが鍔の長さは2.4~3.1cmをはかり、断面は台形、鍔は短く上向きにつく。下体部にススが多く付着している。

c. 須恵器（第12図、図版15-17・20）

蓋坏（第12図1~3、図版15-1・4・5）

1. 壱蓋 C地区自然河川Ⅲより出土、口縁部はやや下外方に下り、端部は丸い。天井部はやや低く丸い。天井部外面を回転ヘラ削り調整、他はナデ、稜部はわずかに凹凸をめぐらす。口径11.3cm、器高3.7cm。

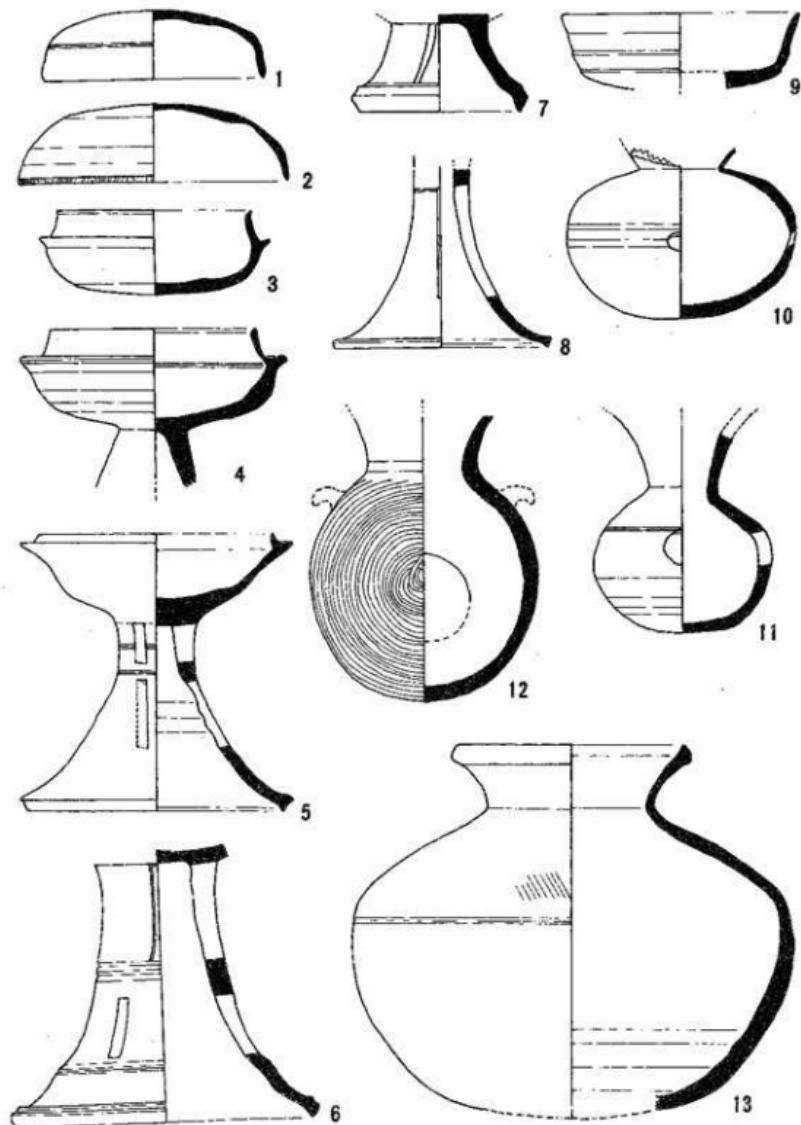
2. 壱蓋 C地区自然河川Ⅲ下層より出土。口縁部は下外方に下り、端部は丸い。天井部はやや高く丸味をおびている。天井部外面は重回転ナデ調整、口縁端外面にハケメ。口径14.3cm、器高4.2cm

3. 壱身 D地区井戸4の上層部より出土。たちあがりは内傾後直立にのび、端部は内傾する平面をもち、端部はやや鋭い。受部は上外方にのび端部はやや鋭い。底体部は深くやや丸味をもつ。底体部外面を回転ヘラ削り調整、口径10.2cm、器高4.5cm、たちあがり高1.4cm、受部径12.1cm。

坏身 C地区中世造構精査中に出土。口縁部は上外方にのび端部は丸い。底部は深く平らで、端に逆ハの字形の高台を付す。

口径17.9cm、器高5.7cm、高台高0.6cm。

高坏（第12図-4~9、図版15・16・17・20）



第12図 土器実測図Ⅲ

0 5 10 15cm

小破片の出土がほとんどで、反転復元により完形に実測し得たものは1点のみで、他は脚部、坏部のみの完形もしくは破片で出土した。

4. D地区溝4の西端で、遺構面上層の灰褐色土層中より出土。脚部下半欠損、坏部のたちあがりは内傾してのび、端部は内傾する凹面を成す。受部は上外方にのび端部は丸い。底体部は深く丸味をもつ。脚部は基部よりやや外湾気味下外方にのび以下欠損、口径9.8cm、残存高8.2cm、たちあがり高1.5cm、基部径3.8cm。

5. C地区自然河川Ⅳ上層の青砂層より出土したものでたちあがりは内傾後直立してのび端部は丸い。受部は上外方にのび端部は丸い。底体部は深くやや丸い。脚部は垂直に下った後、下外方に下り裾部で短かく水平に開き、やや外下方に下ったのち、内傾する凹面を成す。端部は丸い。脚柱²上に1条の沈線をめぐらし、その上、下方に2方向の長方形スカシをもつ。口径14.6cm、器高14.8cm、たちあがり高0.5cm、基部径4.3cm、脚部径14.6cm。

6. C地区大溝1の上層黄褐色砂質土層より出土。杯部欠損、脚部は外湾気味に下外方に下り裾部で外反し、凹面をなして下外方に下がったのち、内外方に下り端部は丸い。上方に2条の沈線がめぐらし、その上・下方に千鳥をなす4方向の長方形スカシがある。下段のスカシ下に1条の沈線がめぐらす。

残存高14.5cm、基部径6.5cm、脚部径16.3cm。

7. C地区大溝1より出土。坏部欠損、脚部は外湾気味に下外方に下り、裾部で役をなし外傾後内傾した凹面をなす。端部は丸い。3方向の長方形スカシをもつ。残存高5.1cm、基部径5.1cm、脚底径8.5cm。

8. D地区大溝2より出土。脚上部欠損、脚部は下外方に下り、裾部で短かく水平にのびた後内傾して凹面をなす。端部は丸い。残存脚上位に1条の沈線をめぐらし、沈線下位に2方向の幅0.15cmの長方形スカシを有する。残存高9.3cm、脚部径6.5cm。

9. D地区大溝2の最下層より出土。基部より下部欠損、口縁部は上外方にのびた後外反し端部は丸い。底体部は深く平らで口縁部中位と下位に2条の凸帶をめぐらす。口径12.5cm、残存高3.9cm。

鰐 (第12図-10・11、岡版16)

10. C地区中世遺構溝7肩部より出土。口縁部欠損、肩部は内湾して下外方に張り出し体部は反円である。体部最大径は体部中位に位置し、その位置に外上方から円孔を穿つ。口縁部外面に波状文。体部外面下部に回転ヘラ削り調整、残存高8.7cm、基部径4.4cm、体部最大径12.2cm。

11. 自然河川上より出土。口縁部欠損、肩部は内湾気味に下外方に張り出し、体部最大径は体部中位に位置し、その位置に円孔を穿っている。円孔直上に1条の沈線をめぐらし底部はやや平らである。体部外面に回転ヘラ削り調整、残存高11.5cm、基部径3.7cm、体部

最大径9.4cm。

提瓶（第12図-12、図版16）

12. C地区自然河川Ⅱより出土。口頸部、把手欠損、肩部、底部は正面より球形を成しカキメ調整を施す。基部径5.9cm、残存高15.2cm。

壺（第12図-13）

13. D地区大溝2の下層より出土。口頸部は外湾しながら短かく上外方にのび、口縁部は肥厚しながら上内方にのび端部は丸い。肩部はやや内湾しながら横に張り出し屈曲して丸味をもちら下内方に下り以下欠損。体部最大径は中位よりやや上に位置する。最大径に沈線1条をめぐらし、その上位に斜文を施す。体部外面下位に回転ヘラ削り調整、他は回転ナテ調整。口径12.1cm、残存高19.3cm、基部径9cm、体部最大径23.6cm。

器台（図版17）

C地区大溝1の西側肩部より、2条の沈線を上・下の2帯にもち、それぞれの沈線の上位に四方向の長方形スカシをもち、下位の沈線下方に波状文をもつ器台脚部。C地区自然河川Ⅰ、D地区大溝2より沈線下位に縱方向にヘラ描き状の平行文を施す器台脚部の小破片が出土している。

d. 土師器（第13図-1～9）

高坏（第13図-8・9、図版18・20）

8. C地区大溝1の造構検出面の上層黄褐色土層より出土。やや深い環部をもち、环底部から内湾しながら口縁部にいたり端部をうすくとじる。脚柱は基部より直下に下った後外反して裾部でさらに外反する。环部中位以下、脚柱部に縱方向のハケメ調整。口縁部内外面はナテ調整、脚部内面は横向のハケメ。淡褐色、口径15.6cm、器高11.8cm、底部径11.4cm。

9. C地区大溝1の上層より出土。环底部からやや内湾気味にのびて口縁部にいたる。端部は薄くとじて丸い。脚柱部は内湾気味に直下にのびた後、下外方にのび裾部で大きく開く。赤褐色、口径14.4cm、残存高13cm

甕（第13図-4～7）

4. C地区自然河川Ⅱ最下層青灰色砂質土層より出土。口頸部はややゆるやかに屈曲外反して上外方へのび、端部は丸くとじる。体部中位に最大径をもつ球形で丸底。胴部と底部の接合面は段をなし、縱方向のハケメ調整がなされている。胴部にススの付着。口径9.1cm、胴部最大径11.3cm、器高11.2cm。

5. D地区井戸状造構内堆積土下層の灰褐色粘質土層より出土。（図版18）

口頸基部でやや鋭く屈曲し、外湾して上外方へ肥厚して開く。端部は丸くとじる。胴部最大径は中位に位置し球形を呈する。底部と胴部の境に段をもち、外側は縱方向のハケメ、

中位以下はやや乱方向となる。口縁部内外面ともナデ調整、底部、体部^ミスス付着、灰褐色。口径13.1cm、胴部最大径15.8cm、器高15.3cm。

6. 上記5と一括出土したもの。(図版18)

口頭部は鋭く屈曲し、外湾気味に上外方へ開く。口縁部内外面にナデ調整。胴部最大径を中位よりやや上にもつ。丸底、やや胴長で中位より下にゆるやかな段をもち、外面^ミ上方は縱方向、^ミ下方は乱方向のハケメ調整を施している。中位以下にスス付着。灰褐色。口径15.6cm、胴部最大径20.3cm、器高24.2cm。

7. C地区溝4検出面の上層の黄褐色砂質土より出土。口頭部はゆるやかに「く」の字形に外反し、わずかに外湾しながら上外方にのび端部は丸くとじる。口縁部内外面にナデ調整を施している。胴部最大径は中位に位置し、球形丸底を呈する。胴部外面は^ミ上方に縱方向のハケメ調整、内面はヘラ削り後ナデ調整を施し、2条の粘土紐接合痕が残る。黄褐色。口径12.8cm、胴部最大径16.5cm、器高14.6cm。

塊(第13図1~3、図版18)

1. C地区自然河川Ⅱ青灰色砂質土より出土。(図版18) 底部よりややゆるやかに内湾して上外方にたちあがり端部は丸い。全体に深く丸味をもつ。巻きあげ法で成形され、外面は指整形の後調整を行っていない。そのため粘土紐接合痕が明瞭に残る。乳褐色。口径9.7cm、器高4.4cm。

2. C地区溝14の検出面上層より出土。底部より肥厚して内湾しながら上外方にのび、やや外反して丸くとじる。底部はやや平らである。全体に浅い。口縁部内外面ナデ調整0.2~2mmの砂粒を含み色調は赤褐色。口径6.8cm、器高3.1cm。

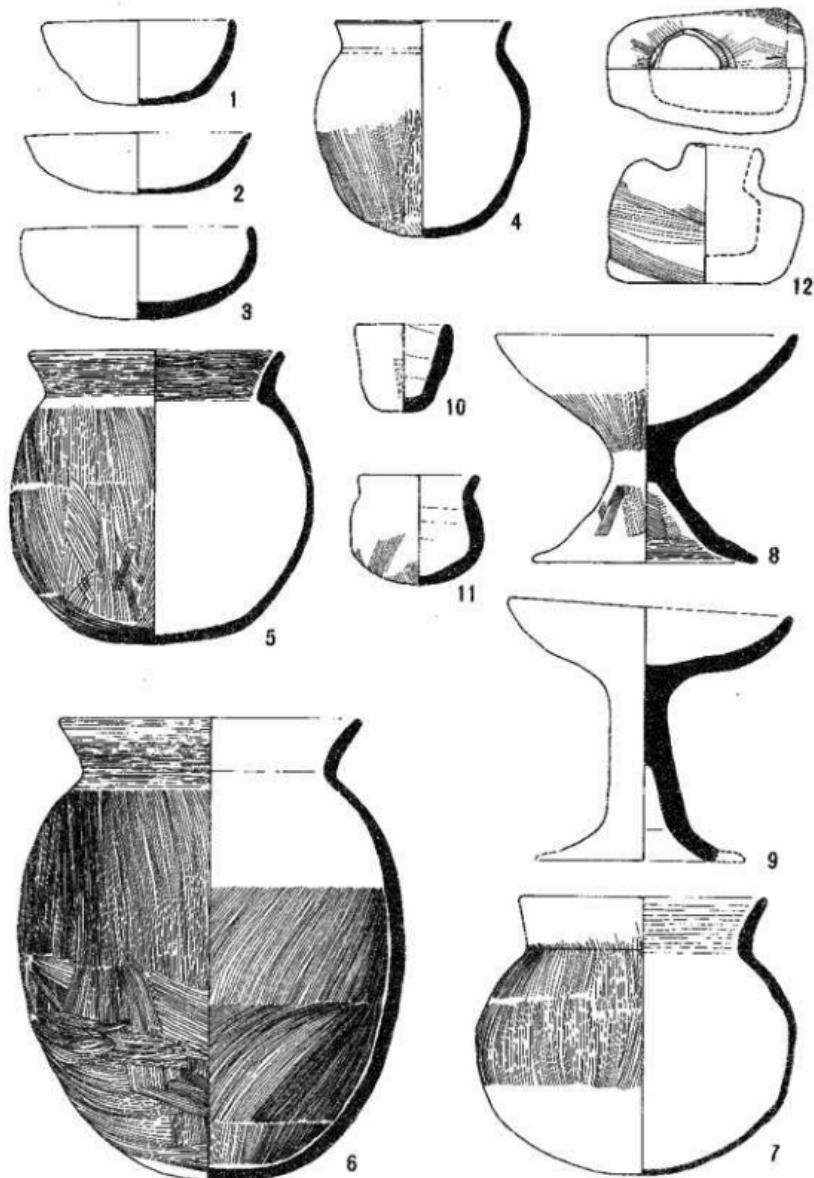
3. D地区井戸状遺構内の下層灰黒色粘質土より、甕とともに一括出土した。(図版18-1)
全体にやや浅く、口縁部は内湾してたちあがり、端部は内湾したまま丸くとじる。体部は平坦な平底から丸くゆるやかにのびて口縁部につづく。内外面ともにナデ調整。1~2mmの黒い砂粒を含み、赤味のある茶褐色の色調である。口径11.8cm、器高5.8cm、体部最大径12.2cm。

鏡(図版19)

C地区大溝1の西側肩部より出土。口縁部は弱い「く」の字形で外湾しながら上外方にのび、端部は外傾した凹面をなす。肩部は下外方にわずかに内湾しながらのび、把手にいたる。把手より下内方にのび以下欠損。把手は凹面をもつ平面三角状のもので、外上方に屈曲してのび、端部は丸い。外面はていねいにナデたのち、口頭部外面に縱方向のハケメ調整、体部^ミ以下に斜方向のハケメを施している。口径26.2cm、残存高18.5cm。

甕(図版23-1)

C地区大溝1の西側肩部より出土。



第13図 土器実測図IV

0 5 10 15cm

平底の底部からほぼ直線的に少し開き気味にたちあがっている。蒸氣孔は中央に円形の孔を穿ち、その周囲に楕円形の孔を穿っている。

e. 手捏ね土器 (第13図10~12、図版19)

10. C地区自然河川Ⅱ出土。(図版19)

平らに近い底部をもち、底部より上方方にやや内湾気味に肥厚させてのび、端部は丸い。輪積み三段の粘土紐接合痕を残す。口縁部内外面横ナデ。手捏ねの指圧痕が内外に明瞭に残し、体部下位に継のハケ調整を施す。口径4.7cm、器高4.5cm。

11. D地区井戸状遺構内の下層灰黒色粘質土層より出土。(図版19)

口頭部はゆるやかに外反して上方方にのび、端部は丸くとじる。体部は半球状を呈し、底部は丸い。底部近くにナデ調整の後のわずかなハケメ調整がみられる。内面は輪積の粘土紐接合痕が明瞭にみられ、内外面ともに指圧痕を残す。灰黄褐色を呈し、焼成は軟質。口径6cm、器高5.8cm、体部最大径7cm。

12. 体部は円柱状の横槌に似た形で、体部中央に短かい口頭を付す。塊形土器を手こねでつくり、口縁部を厚い粘土板で蓋をしたのち、体部を穿孔し口頭部をひねり出した状況で口頭部の厚みは体部にくらべ特に薄い。体部外面に指圧痕多く、ナデ調整の後、外面に斜方向にハケメ調整をしている。粗雑な肉厚のつくりである。黄褐色、焼成軟質(図版19-3)口径6.5cm、体部長さ10cm、側端径5cm・8.5cm。

f. 墓輪 (第14図、図版19)

円筒埴輪、人物埴輪と堆定される埴輪を出土したが、すべて小破片であった。

円筒埴輪

1. B地区溝1より溝底部にそい、円筒埴輪を縦に半割りにし、内面を上にしてふせた状態で出土した。

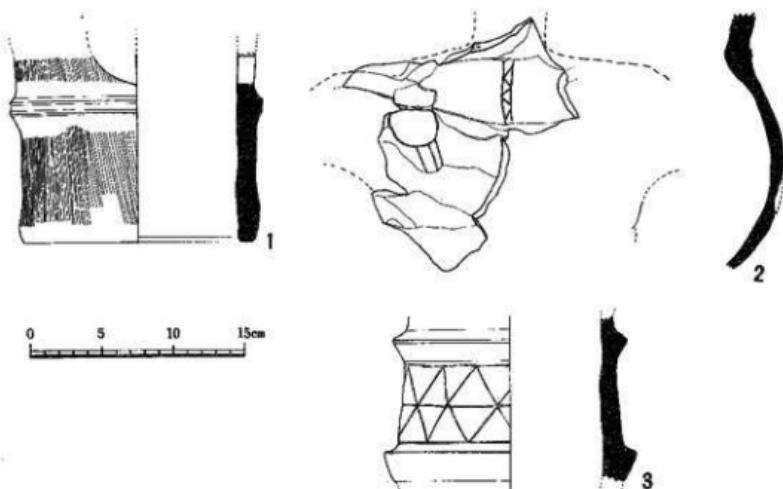
器壁は1.2cm前後、タガ幅0.8cm、高さ0.6cm弱、外面は縦方向のハケメを施し、色調は黄褐色、焼成はやや硬質である。

人物埴輪 (図版19-5)

2・3 D地区大溝2の溝堆積土最下層の青灰黒砂質土層より流木、須恵器、土師器片とともに9点の破片が出土した。

円筒状埴輪片、断面截頭直角三角形状のタガ状のものを二段に配し、その間にヘラで三本の平行線を描き、二段に山形文(三角形文)を配したものである。

上記円筒状埴輪上に接合すると推定される埴輪片は、胴ぶくれをした肉厚0.8cmほどの外面に縦の2直線間に山形文を描いた文様が施されている。剝離痕とみられる径4cm前後のボタン状痕が2箇所みられた。色調はともに淡黄褐色を呈する。武人像ではないかと推定される。



第14図 壁輪実測図

g. 轉式系土器、製塩土器 (図版21・22)

轉式系土器

小破片で31点出土。うち須恵質土器11点で縄縞タタキ、格子目タタキを施す。土師質土器片はすべて格子目タタキで2~4mmが大半を占めている。A~D地区全般から出土。

なお1~3条の2mm幅の溝状えぐりをもつ。土師質有溝角状把手もC地区自然河川、D地区大溝2から出土している。

製塩土器

小破片のみ29点が出土。造構内からはA地区溝1、C地区中世ピット、自然河川、大溝1より出土している。

他は造構検出前の精査中に黄褐色砂質土より出土したものである。

底部に近い。やや湾曲する下ぶくれの胸部にタタキメを平行に施している。器壁は薄い。

2. 石器および石製品 (第15図、図版24)

a. 石器・石鏃 (第15図-9~12、図版24)

出土4点のうち1点はA地区溝1からの出土であるが、他の3点はC地区の中世造構検

出面の上層にあたる、中世以降に客土整地されたと考える黄褐色砂質土層からの出土である。すべて打製であり、石材はサヌカイトを用いている。

9. A地区溝1出土。長さ2.5cm、幅1.65cm、厚さ0.3cm。
10. C地区溝13の検出面の上層より出土。長さ1.6cm、幅1.45cm、厚さ0.55cm。
11. C地区溝10の検出面の上層より出土。先端欠損、残存長1.3cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm。
12. C地区溝11の検出面上層より出土。先端欠損。凸基有茎式で、幅狭で厚身がある。残存長3.1cm、幅1.35cm、厚さ0.5cm。

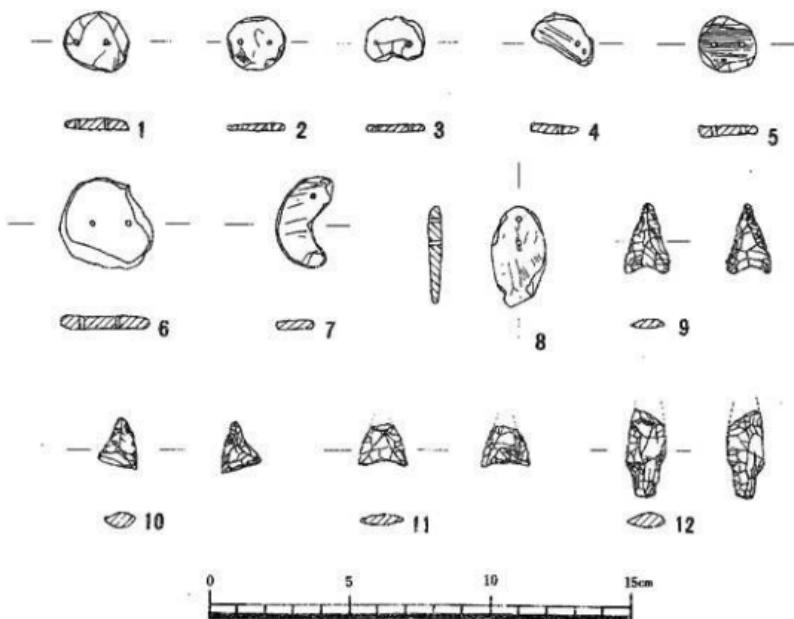
石斧

C区大溝1の溝内堆積土の最上層灰褐色粘質土層より出土。長さ11.3cm、幅5.5cm、厚さ3.8cmの中型蛤刃の石斧で、打撃痕が刃部に残る。

b. 滑石製石製品（第15図1～8、図版24）

有孔円板（第15図1～6）

1. C地区溝6から出土。直径2.2cm、厚さ0.3cm、1cm幅で径0.2cmの円孔2個を一方



第15図 石器・石製品実測図

より穿つ。

2. C地区自然河川Ⅲから出土。長径2.1cm、厚さ0.15cm、1cm幅で径0.15cmの円孔を一方より穿つ。

3. C地区自然河川Ⅲから出土。長径2.1cm、厚さ0.2cm、1.2cm幅で径0.15cmの円孔2個を一方より穿つ。¹欠損。

4. C地区自然河川Ⅲ出土。厚さ0.18cm、円孔径0.18cm・¹欠損。

5. D地区大溝2の検出面より上層の青灰色砂質土より出土。長径2cm、厚さ0.25cm、1cm幅で径0.15cmの円孔を両面より穿つ。

6. C地区自然河川Ⅲから出土。やや歪みをもった円形を呈する扁平板状の円板で、両面にすり痕を残す。1.3cmの間隔をもって直径0.1cm・0.15cmの円孔をあけている。長径3.5cm、厚さ0.38cm、乳褐色。

他に¹欠損の有孔円板がC地区自然河川Ⅲから出土。

剣形石製品（第15図8、図版24）

C区自然河川Ⅱから出土。滑石製で剣形を模した薄い板状のもので長軸中心線上に0.8cmの間隔をあけて、径0.15cmの2個の円孔を穿つ。両面、側面にスリ痕残る。長さ3.5cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm。

勾玉（第15図7、図版24）

C区自然河川Ⅲ出土。滑石製で扁平な板状のものを加工したもので、全長3.2cm、厚さ0.2cm、径0.15cmの円孔1個を両面より穿孔している。スリ痕のこる。

臼玉（図版24-2）

C地区自然河川Ⅱから4点、Ⅲから7点の出土をみた。滑石製で径0.35～0.5cm、長さ0.15～0.35cmの円柱の両側面から径0.15～0.25cmの円孔を穿っている。

ガラス製小玉（図版24）

C地区自然河川Ⅲの青灰色砂質土層より出土。ガラス製球体を両側から穿孔したもので、コバルトを含み紫紺色を呈する。球体の径は0.8cm、孔径0.3cmである。

石鏡

C区溝8検出面の上層から出土。底部破片である、滑石製。

その他C地区河川Ⅱで蛭石2点、砾石1点、D区落ち込み状遺構で砾石1点の出土がある。

3. 木製品および動物・植物遺体ほか。（図版23・25・26）

D地区大溝2の溝堆積土灰黑色砂質土層より舟形、槽形木製品、C地区河川Ⅲより刀形、櫛形木製品、C地区井戸3よりヘラ状竹製品のほか、馬歯、鹿角、桃の種子、菱の実が出土した。

a 木製品（図版25・26）

舟形木製品 (図版25)

D地区大溝2より出土。全長14.4cm、舟底部幅2.1cm、舟上部幅2.8cm、高さ1.6cmの断面逆台形状を呈し、舟底部はU字形をなす。先端2cmを四面に鋭く削り、尖らして船首とし、中央部は1.05cmの深さでくりぬき、船尾は垂直に切断している。

櫛形木製品 (図版26)

D一大溝2出土。全長18.3cm、幅5.7cm、厚さ4cmの木材の中央部10.5cmに長さ10cm、深さ約1.7cmの凹面をつくり、さらに幅3.5cm、深さ0.8cmのゆるいカーブのV字状のえぐりをいたるものである。鈍い刃先の工具で粗雑に削った状況がみられる。櫛状木製品(図版26) C地区河川畠の杭列の間から出土。

卓球のラケット状の加工板材である。長方形部は長さ10.7cm、幅7cm、厚さ1.2cm、柄部は長さ2.7cm、幅1.1cm、厚さ1.2cmの断面長方形である。長方形の先端部は磨耗している。

刀状木製品

C地区河川畠の杭列の間から出土。長さ19.7cm、最大幅2.3cm、厚さ0.8cmの木刀状のものに横方向に45°屈曲した基部をもつもので、全長23.5cm、削り痕がみられない丁寧なつくりである。

ヘラ状竹製品 (図版25)

C地区井戸3の曲物内より出土。全長17.3cm、先端幅0.5cm、基部幅1.7cm、厚さ2cmの竹を皮側を残し切削したものである。幅広の部分は皮側に長さ5.3cm、幅0.3cm、深さ0.1cmの溝をもっている。

b. 動植物遺体ほか

桃菱 (図版23)

桃の核がC地区自然河川底部で80点、C区大溝1で21点、D地区大溝2で43点、計144点が出土した。長径1.9~2.8cm、幅1.6~2.5cm、厚さ1.2~2.1cmで鼠歯痕のあるものは43点を数え、うち6点は両側からえぐられている。菱の実はC地区大溝1の底部から3点出土。

馬齒・鹿角など

馬齒 C区自然河川より2点、SD-6大溝肩部より2点、D区大溝2の西側肩部より4点出土。

鹿角 長さ9.5cm、径1.7cm、C区自然河川畠より出土。

小動物の関節部8点、C区自然河川より出土。

c. 錢 (図版24)

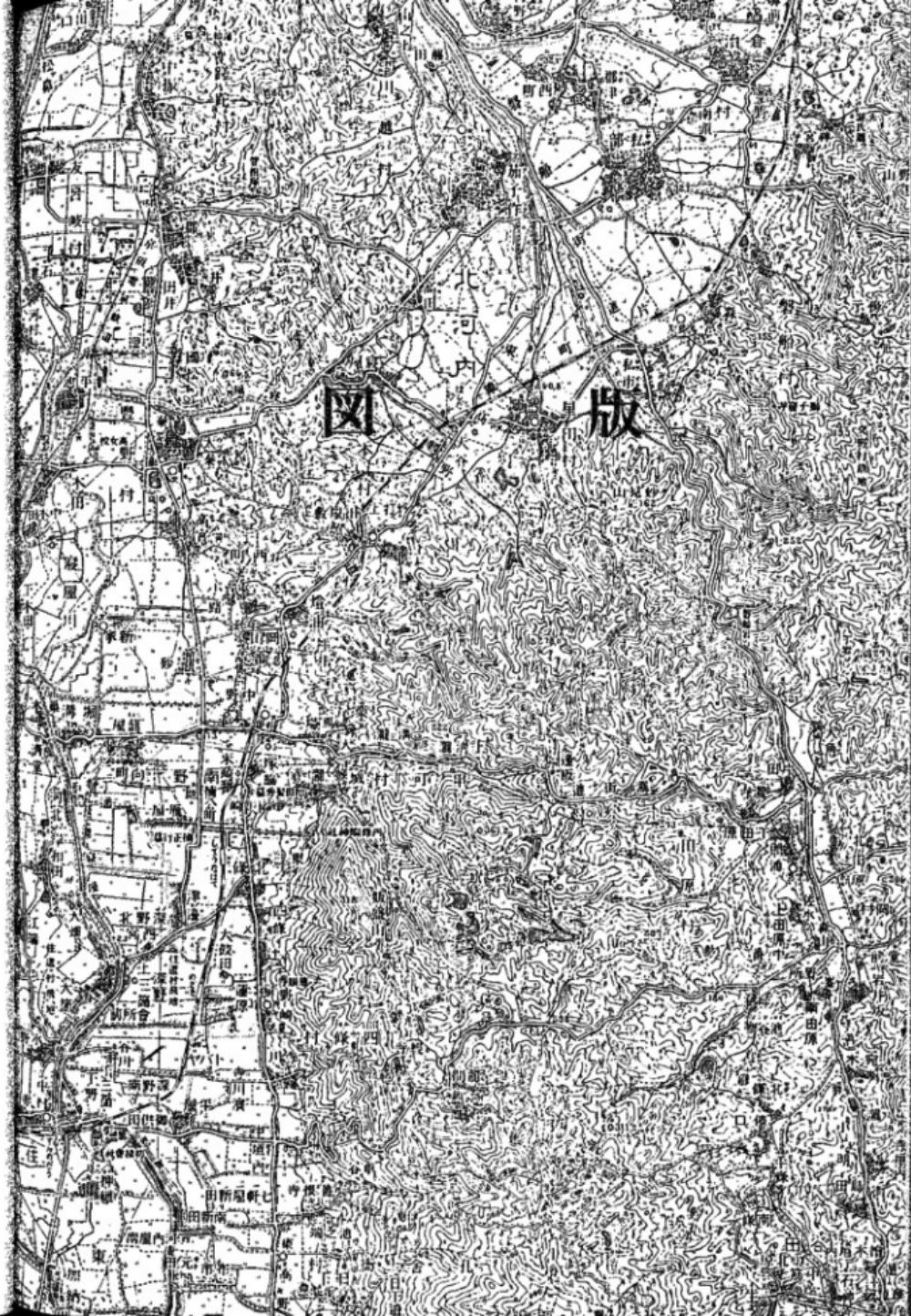
C区中世造構ピットNo.169から北宋錢、皇宋通宝(初鑄造年1309年)1点の出土をみたが、腐蝕ほとんどなく遺存状態は良好であった。

IV おわりに

今回の調査の結果、A・C区で多数の中世掘立柱建物の柱穴とみられるピット群と、それぞれ様式の異なる3基の中世の井戸を検出し、さらに古墳時代の大溝、井戸1基が検出できたことは大きな成果であったと考える。

勿論、今後の資料の増加をまたねばならないが、①. 極めて小範囲の地域で3基の井戸を含めた多数のピット群を検出したことは、当中野地区における中世村落の全容を解明するまでの貴重な資料と云える。(井戸は出土遺物から鎌倉時代～室町時代に使用されたと考えられる) ②. 古墳時代中期から後期にかけて、大溝が南から北に流路をとっており、大溝ならびに大溝東側で祭祀遺物である滑石製模造品、手捏ね土器、木製模造品の出土をみてことから祭祀遺跡・遺構がこの清滝丘陵周辺において将来検出される可能性が極めて大きい。③. 韓式系土器、製塩土器および馬齒等の出土品の関連性、またこれらと祭祀遺跡との関連、隣接する奈良井遺跡との関係等、幾つかの問題解明のための貴重な資料と考えられる。④. 縄文時代の石器、弥生時代の石斧の出土をみたことは、調査地附近に、いわゆる石器時代遺跡が確実に存在する証左であり、今後の調査に期待される。

版圖





C地区（東から）



D地区（東から）



A地区（東から）



B地区（東から）



(東から)

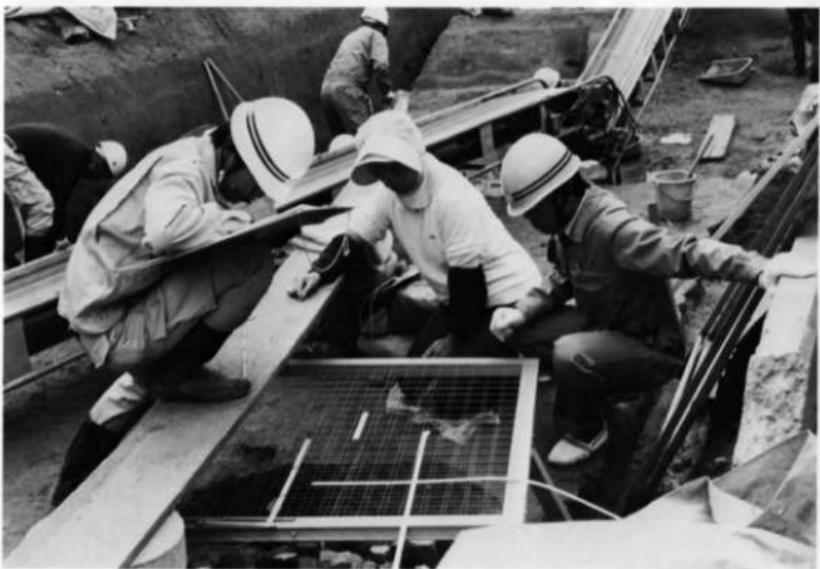


(西から)

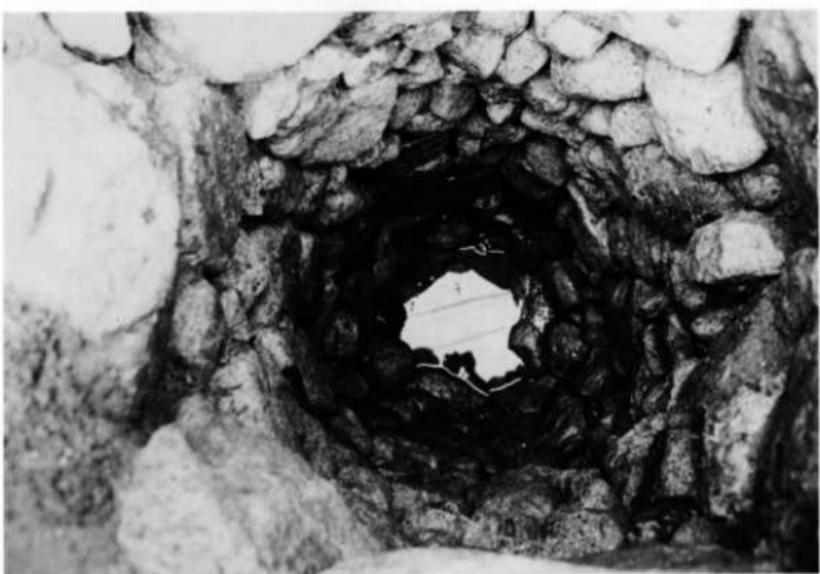
図版4 D地区調査地全景および実測風景



(東から)



井戸4の実測風景



南からの断面



最下層曲物



(東から)



大溝1と自然河川III（東から）



(西から)



图版9 D地区井戸4、土器出土状况



(上層)



(下層)



(東から)





(西から)



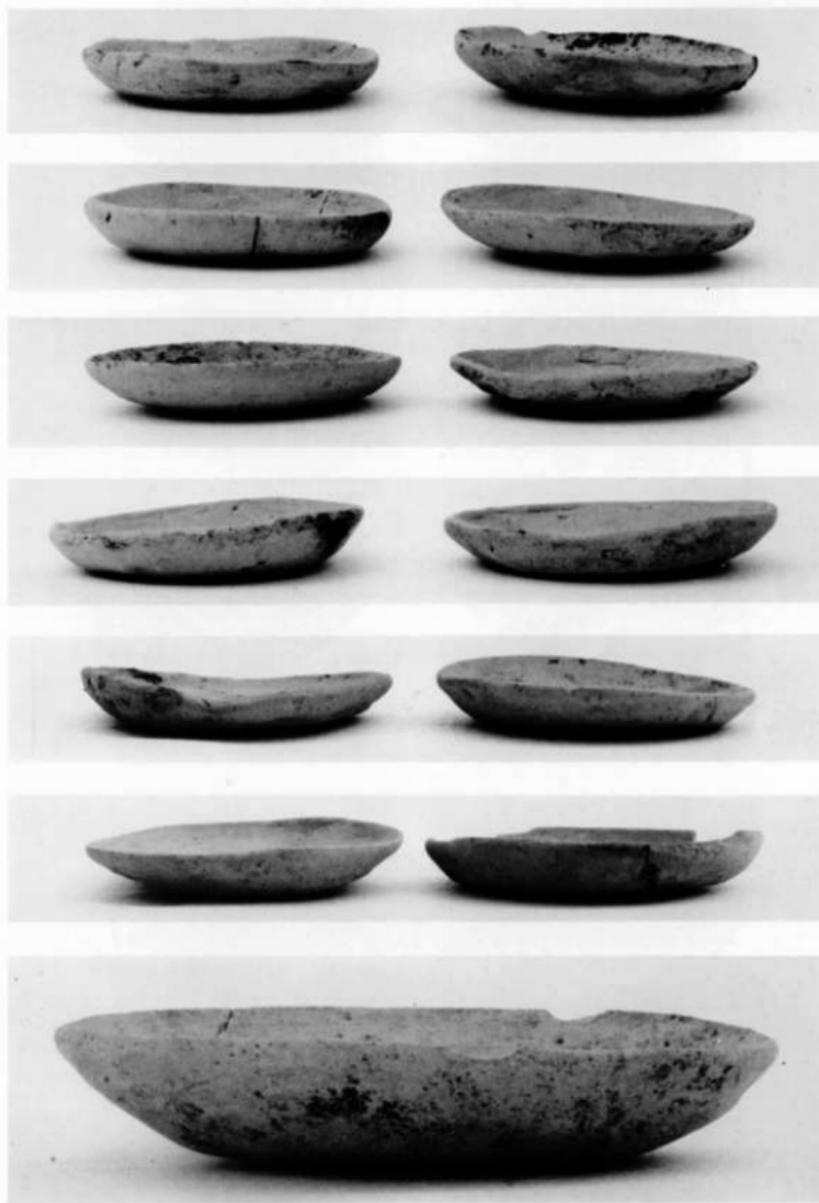
(南断面)

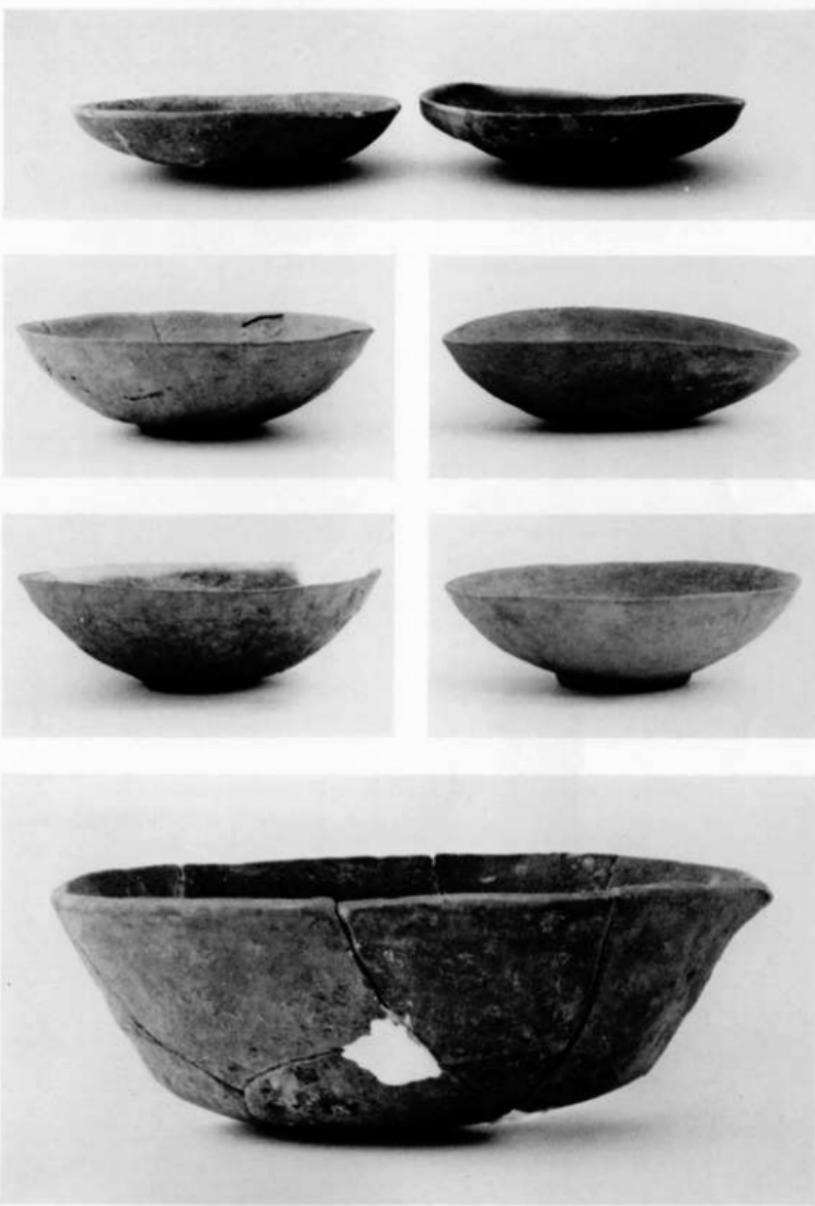
図版 12 D 地区大溝および舟形木製品出土状況

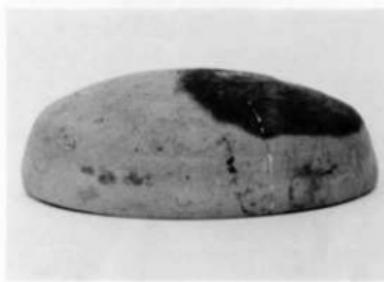


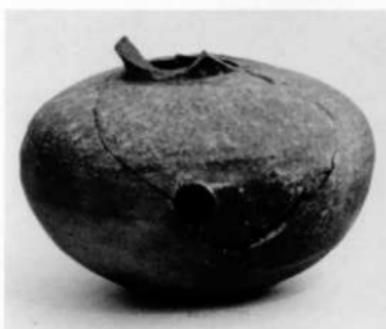
(西から)







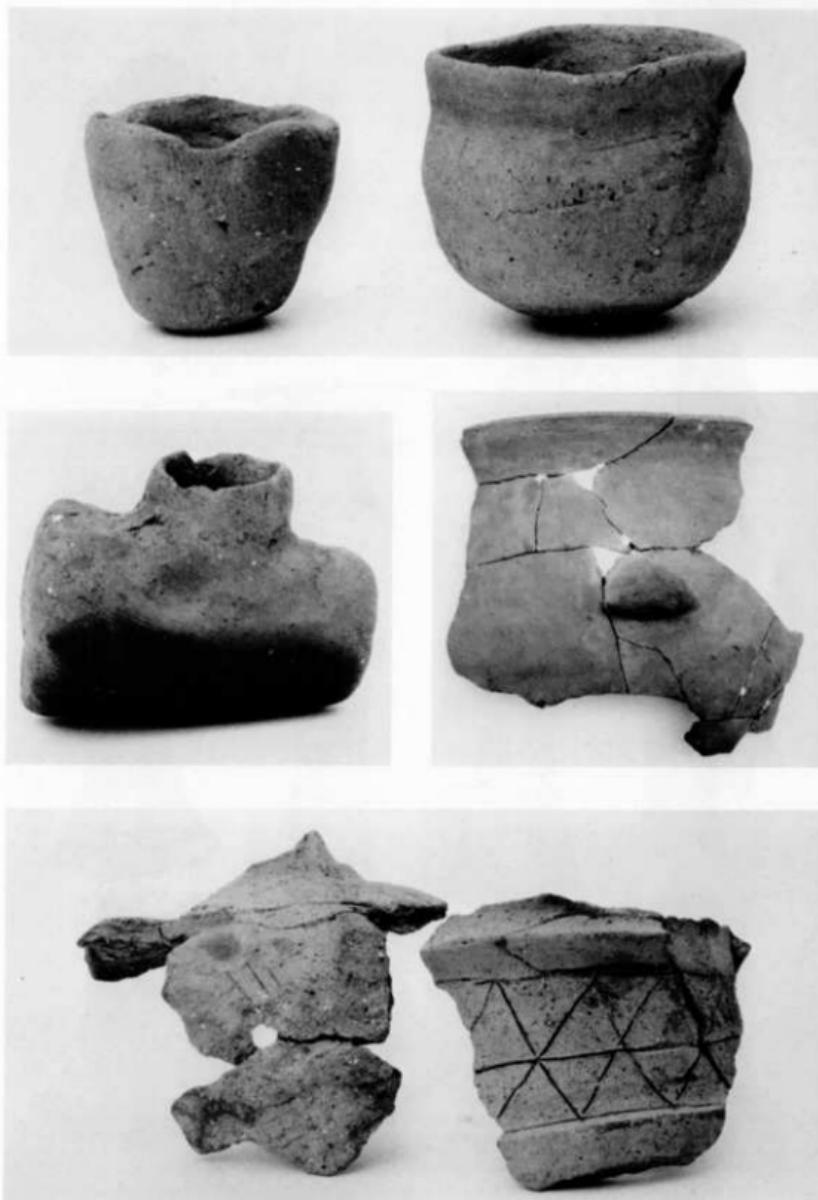




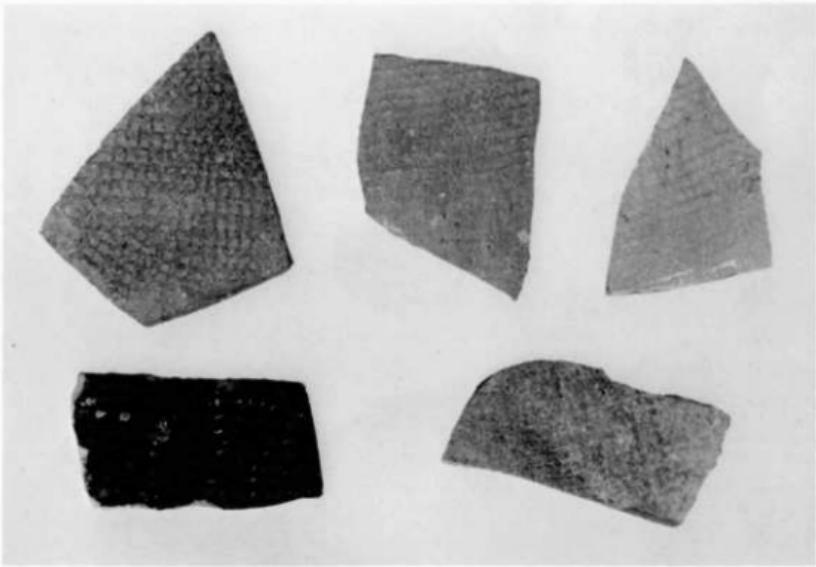


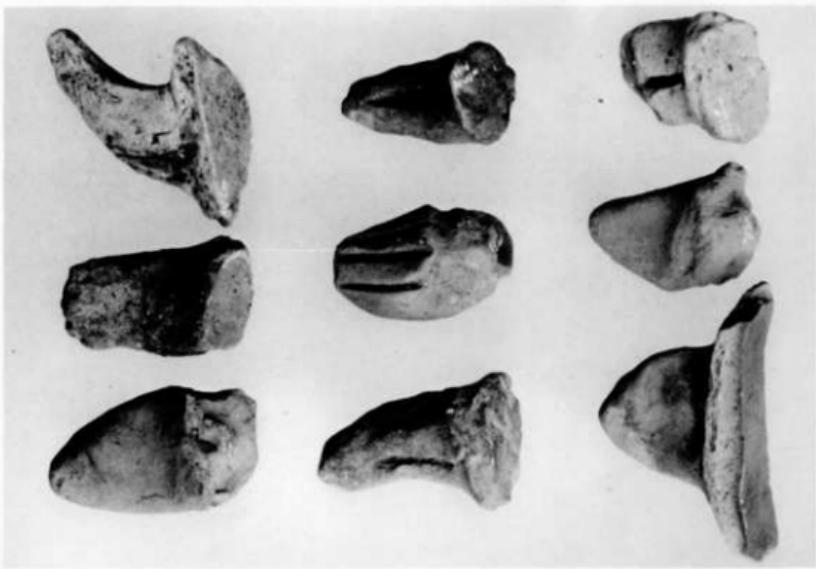
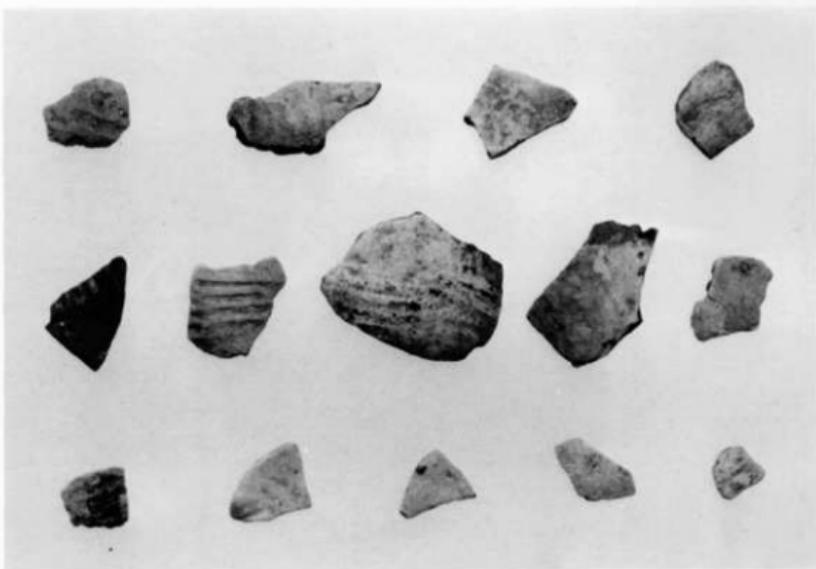


図版 19
遺物写真・土器Ⅶ、人物埴輪



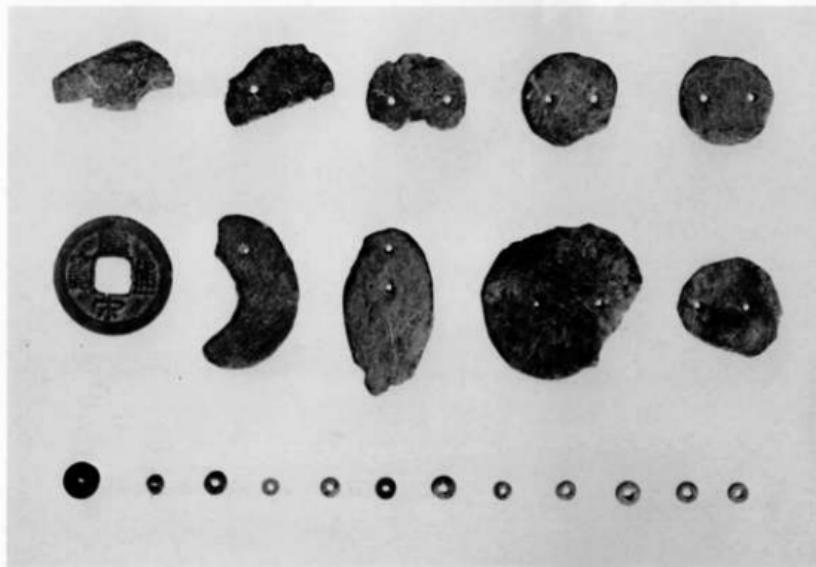
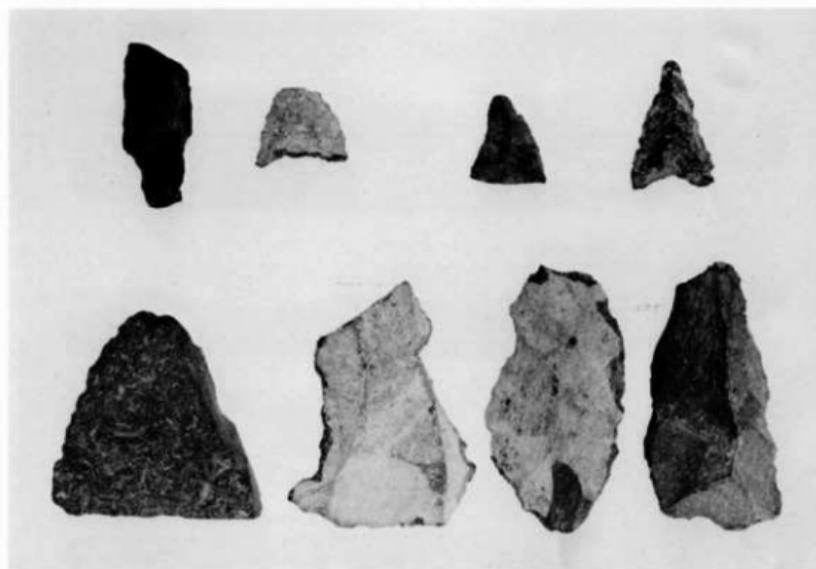


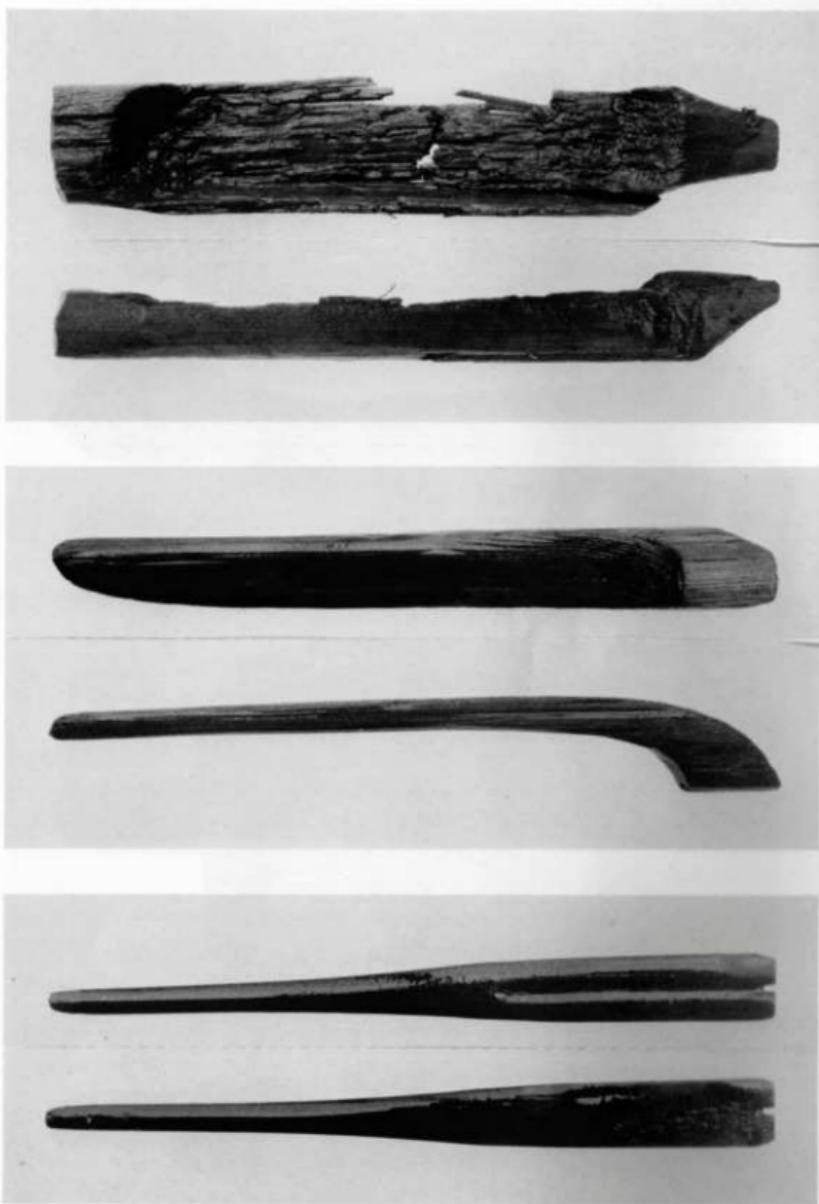


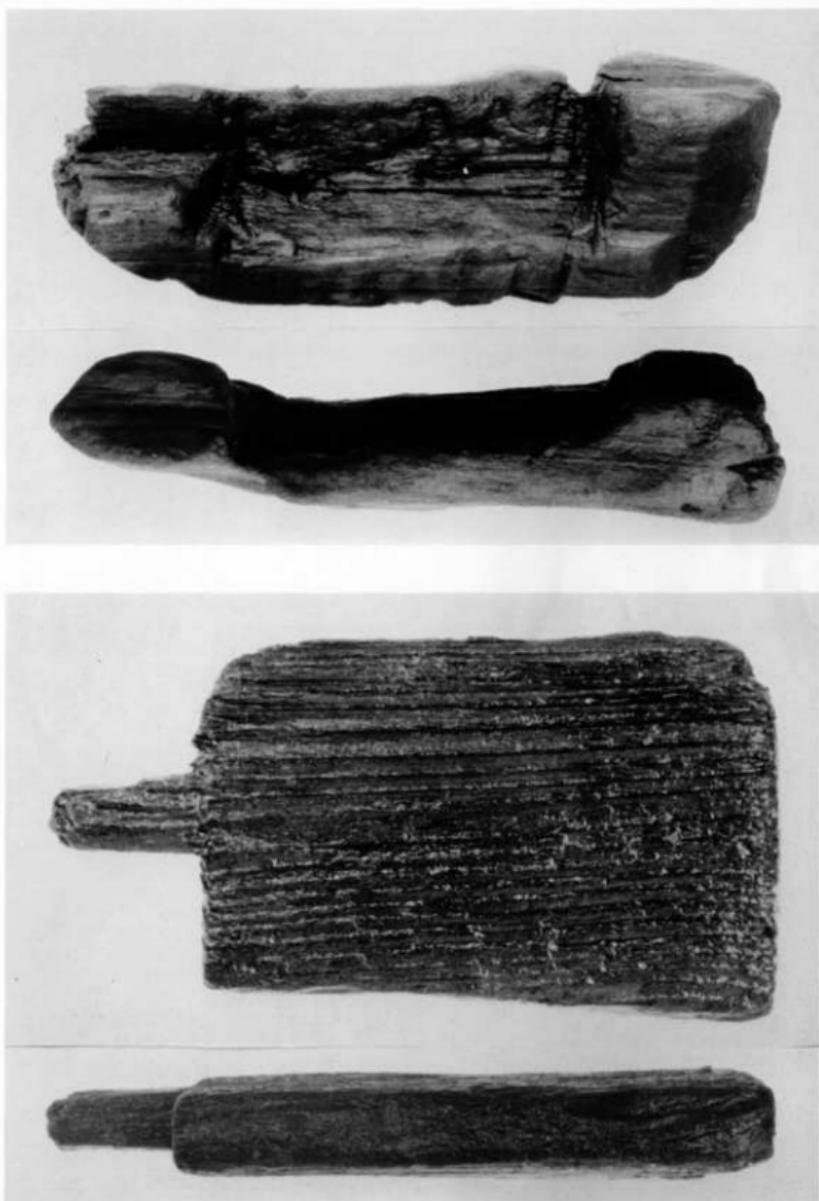


圖版23 遺物写真・土器XII、植物遺体









中野遺跡発掘調査概要・IV

昭和62年3月発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会

〒575 四條畷市中野本町1-1

印刷 田中耕株式会社